

第4部 「授業力アップコース」講座構築報告

I. 概要

II. 実証授業

1 AMA 日本カレッジ

1. 1 概要

1. 2 方法

1. 3 結果

1. 4 考察

1. 5 今後の課題

2 清風

2. 1 概要

2. 2 結果

2. 3 考察

3 清風養成

3. 1 概要

3. 2 結果

3. 3 考察

4 考察

(1) 運営モデル

(2) 研修カリキュラム

(3) 養成講座カリキュラム

(4) 研修ビデオ

(5) 受講生管理や評価方法

(6) コンテンツの管理

III. 授業レベルアップコース

1 方針

2 カリキュラム

2. 1 ウォーミングアップ

2. 2 初級授業の改善

2. 3 カリキュラムおよび研修ビデオの提示の仕方

3 運営モデル

IV. eLearning 併用型日本語教師養成講座

1 概要

2 企画

2. 1 要件定義

- 2. 2 既存のカリキュラムの概要
- 3 カリキュラム
 - 3. 1 解決の方針
 - 3. 2 カリキュラムの全体像
 - 3. 3 初級実習部分のカリキュラム
 - 3. 4 eLearning のカリキュラム
 - 3. 5 授業の実施順序
- 4 運用方法
 - 4. 1 運営モデル
 - 4. 2 講師のスタイル
 - 4. 3 運用技術
 - 4. 4 受講生管理・評価
 - 4. 5 講師管理
- 5 今後の課題

付録4-1 「授業力アップコース」研修資料（お宝シラバス）

付録4-2 「授業力アップコース」研修ビデオリスト（追加）

付録4-3 「授業力アップコース」研修テキスト

付録4-4 「授業力アップコース」eLearning 併用型日本語教師養成講座カリキュラム

I. 概要

(1) 実証講座の開講

3年間で作成したコースカリキュラムと eLearning 教材を利用・併用して、実証講座を開講した。講座の問題点の洗い出し、開講手続き・科目の選択法・講座受講者の評価法・学習者管理法を整理した。校内講師研修と日本語教師養成講座内での利用の2パターンを検証した。

(2) コースカリキュラム（詳細）の更新

実証講座の結果をもとに、コースカリキュラムを更新した。

(3) 教材の更新・追加作成

実証講座の結果をもとに、必要な教材を更新・追加作成した。極力 eLearning のコンテンツではなく、ペーパーベースを中心とした。初級の重要な教材についてのみ eLearning コンテンツを追加作成した。

(4) 受講テキストの作成

研修反転ビデオのいくつかを取り上げて、研修ビデオを視聴するための受講テキストを作成した。

(5) eLearning 併用型日本語教師養成講座の構築

既存の日本語教師養成講座について、開発した研修ビデオを組み込み、かつ、講師・受講生が教室でもオンラインでも授業ができるように変化させた講座を構築した。1 / 3程度が eLearning 教材で行えるカリキュラムが策定できた。

II. 実証講座

昨年度までに作成したカリキュラムおよび研修ビデオを利用して、3種類の実証講座を開講した。

1. AMA日本カレッジ

1. 1 概要

期間：2019年4月～2020年2月（但し、事業の対象は2019年6月17日から2月15日）

事業期間内の実施回数は130回。

対象：日本語教師

人数：3名

日本語教師歴：専任19年/非常勤1年11ヵ月/非常勤1年半

ねらい：教師の学び直し研修ビデオや「お宝シラバス」を使い、授業のやり方や教案の作り方を学び、主任とやり取りすることによって、教師自身が自分の授業を改良できるようになるよう、本研修を実施した。

概要：教師の授業力アップのために、次のような形で教師研修を行った。

「みんなの日本語」は各課で異なるスキルが要求される。その為、全課にわたり次の（1）から（6）の流れで研修を実施した。また、研修の効果を見るため、「みんなの日本語」を2巡実施した。

研修の流れ

（1）授業方法について主任と話し合う。

（2）教師は、各自で教案を作成する。

研修ビデオやお宝シラバスを見て学んだことを取り込めるよう教案を考える。

（3）教案を見ながら授業を実施する。

（4）教師は、教案の再チェックをして、授業点検をし自己評価をする。

（5）授業前と授業後の教案を主任に提出する。

（6）主任は提出物を確認する。そしてアドバイスをする時もある。

1回あたり、主任の教員研修の指導時間は30分である。また研修を受ける教師の研修時間は、教案作成2時間、授業実施(90分×2コマ)3時間、教案の再チェックと自己評価30分、主任との話し合い30分で、計6時間である。

1. 2 方法

A:「みんなの日本語」 1 巡目

1. 準備

- ①研修ビデオを見て授業方法について主任と話し合う。
- ②教案の書き込み方を統一する。

2. 教案作成

- ①各自教案を作成する。

3. 授業実施

- ①教案を見ながら実施する。

4. 再チェック・自己評価

- ①教案を再チェックして修正し、授業を振り返って自己評価をする。
- ②授業前の教案（2-①）と授業後の教案（4-①）を主任に提出する。

5. 主任との話し合い

- ①主任は2-①と4-①を確認する。
- ②主任は教師にフィードバックする。

以下、2から5を各課について繰り返す

B:「みんなの日本語」 2 巡目 （1 課～4 0 課）

6. 1-①で見た研修ビデオを再度見る。授業方法について主任と再び話し合う。

7. 教案作成

- ①各自教案を作成する。

8. 授業実施

- ①研修ビデオの教授法を取り入れ作成した教案を見ながら授業を実施する。

9. 再チェック・自己評価

- ①教案を再チェックして修正し、授業を振り返って自己評価をする。
- ②授業前の教案（7-①）と授業後の教案（9-①）を主任に提出する。

10. 主任との話し合い

- ①主任は7-①と9-①を確認する。
- ②主任は教師にフィードバックする。

以下、7から10を各課について繰り返す

C:「みんなの日本語」 2 巡目 （4 1 課・42 課前半） 「お宝シラバス」併用

- 1 1. お宝シラバスの内容を確認する。

1 2. 教案作成

- ①各自お宝シラバスの内容と研修ビデオの教授法を取り入れ教案を作成する。

1 3. 授業実施

①教案を見ながら授業を実施する。

14. 再チェック・自己評価

①教案を再チェックして修正し、授業を振り返って自己評価をする。

②授業前の教案（12-①）と授業後の教案（14-①）を主任に提出する。

15. 主任との話し合い

①主任は12-①と14-①を確認する。

②主任は教師にフィードバックする。

以下、11から15を各課について繰り返す

1. 3 結果

(1) 研修実施状況

「みんなの日本語」は各課で異なるスキルが要求される。その為、全課にわたり研修を実施した。また、研修の効果を見るため、「みんなの日本語」を2巡実施した。実施状況は次表の通り。複数の授業分を一度に研修した回もあるため、授業の回数と研修の回数は一致しない。

表 研修実施状況

課	1巡目		備考	2巡目		備考
	授業回数	指導回数		授業回数	指導回数	
0	5		4月9日～ 対象外	1	1	11月1日～
1	1		対象外	1	1	
2	2		対象外	1	1	
3	2		対象外	1	1	
4	2		対象外	1	1	
5	2		対象外	1	1	
6	2		対象外	1	1	
7	2		対象外	1	1	
8	2		対象外	1	1	
9	3		対象外	1	1	
10	2		対象外	1	1	
11	3		対象外	1	1	
12	2		対象外	1	1	
13	3		対象外	1	1	
14	2		対象外	1	1	
15	3		対象外	1	1	
16	2		対象外	1	1	
17	3		対象外	1	1	
18	2		対象外	2	2	
19	3		ここまで対象外	2	2	
20	2	2	6月17日～	2	2	
21	3	3		2	2	
22	2	2		2	2	
23	3	3		2	1	
24	3	2		2	2	
25	3	3		1	1	
26	2	2		2	2	
27	2	2		2	2	
28	2	2		1	1	
29	3	3		2	2	
30	3	3		2	2	
31	2	2		2	2	
32	1	1		1	1	
33	3	3		2	1	
34	2	2		2	2	
35	3	3		2	2	
36	2	2		2	2	
37	3	3		2	1	
38	3	3		2	2	
39	3	3		1	1	
40	2	2		1	1	
41	3	3		2	2	お宝シラバス使用
42	2	2		1	1	お宝シラバス使用
42				1	1	お宝シラバス使用（対象外）
43	2	2		2		対象外
44	2	2		2		対象外
45	2	2		1		対象外
46	2	2		1		対象外
47	3	3		2		対象外
48	3	3		2		対象外
49	1	1		2		対象外
49	2	2	対象外			
50	3	3	対象外	1		対象外
計	125	76		76	60	
計	72	71	事業対象内のみ	62	59	事業対象内のみ
総計	201	136				
総計	134	130	事業対象内のみ			

(2) アンケート結果

研修を受講した教師に対してアンケートを行った。その結果を整理し、次に示す。

1. 教師の学び直し研修ビデオ(以下ビデオ)に関する気づき
 - ①ビデオを見ることで自分の授業スタイルを見直す機会が与えられた。
 - ②ビデオで教え方を学ぶことは、授業見学で学ぶこととは違う気づきが多くあった。
2. 「みんなの日本語」を2巡授業したことで特に変わったこと
 - ①漢字指導が変わった。

1巡目は、自分の漢字授業において、テキストに沿い、教師の知識を学生に伝える情報伝達方式が主だった。2巡目は、研修ビデオで学んだように、漢字マップを書かせたり、ストーリーを考えさせたり、学生主体の指導へと変化した。
 - ②活動内容が変わった

1巡目は、教師 vs 学生、あるいは1名の学生 vs 複数の学生（発表など）という活動が多かった。2巡目は、研修ビデオで学んだように、学生同士の学び合い、教え合いを意識した活動を心がけるようになった。
 - ③時間配分について意識するようになった。
 - ④学生主体の授業において教師の発話に無駄がない授業の進め方を考えたり、学生に十分な発話の機会を与える授業内容を意識するようになった。
 - ⑤さまざまな質問に答えられるように、想定できうる質問を教案作成の時点で考えるようになった。また視点を変えた導入を複数準備するようになった。
3. 「お宝シラバス」を活用してどうだったか。
 - ①教案作成にかかる労力が大幅に減った。
 - ②その課で扱われる文型および接続が一目瞭然であった。
 - ③文法上の留意点の記載がありがたかった。
 - ④「活動例」「練習例」が参考になった。
4. 「お宝シラバス」の関連課の情報を活用し授業準備をするのは、どうだったか。
 - ①教師は「導入の仕方」と「練習」を考えることに集中できるようになった。
 - ②関連課がわかるので、復習も含め授業構成が考えられやすくなり、参考になった。
5. 「お宝シラバス」の今後の活用 について

- ①文型の接続、用法を確認するために教案作成時に利用したい。
- ②留意すべきポイントを参考にして授業準備したい。
- ③「関連教材」を確認し、授業準備したい。
- ④「お役立ちアイデア」を練習のパートにつなげ授業に組み込みたい。
- ⑤「教師メモ」の内容を授業に盛り込みたい。

1. 4 考察

1. 研修効果

(1) 研修ビデオの活用

繰り返し研修ビデオを見て、授業で実践し、主任からフィードバックをもらうことができ、授業を改良できた。

(2) 対話形式で行うオンライン研修

主任と対話形式で行うオンライン研修により、授業法についての気づきを得て、授業を改良できた。また主任に質問して、直接アドバイスを受けられる良い機会となった。

(3) お宝シラバスの活用

お宝シラバスを参考にすることで、教案づくりの時間が大幅に短縮できた。また授業に組み込めるお役立ち情報が多く記されていて大変便利であった。関連課の記載も役立った。

(4) 教案の再チェック・自己評価

授業後すぐ教案を自分で再チェックし、自己評価を行う。そしてそれを主任に提出する。これを繰り返すことにより、教師は自分の授業を客観視する視点ができる。みんなの日本語は課ごとに必要なスキルが異なる。再チェック・自己評価により授業と主任との研修で気づいたことを定着させることができたのではないか。

(5) 総合評価

(1)～(4)を継続することで、研修を受ける教師は教案を自分で改良する技術が付き、授業のやり方も向上していった。この研修方法は効果的であると言える。

2. 主任に必要な能力

(1) 主任は、研修を受けている教師の熟練度の差を正確に把握し、相手の理解度を踏まえた上で、アドバイスをしなければならない。

①教師の熟達度が低い場合

まず、気づきを聞く。

次に教師の質問を聞き、その質問に答える。

教師が理解できる言葉を選び、文脈を考え、アドバイスをを行う。

②教師の熟達度が高い場合

まず、気づきを聞く。

次に教師が理解できているかを確認する。

理解できていることが授業で活かされるようどう組み込むかの確認をする。

(2) 主任は、教案や授業日誌を共有させられなければならない。またそれを学内のデータとして構築していなければならない。

3. 信頼関係

この研修は教師間のリスペクト、つまりお互いに教育者としての信頼関係があり成り立つ研修である。

4. お宝シラバスとは、どんなシラバスか。

①大切なポイントを簡単に確認できる便利なシラバスである。

②学生に無駄な説明をしなくなるシラバスである。

1. 5 今後の課題

- ・研修の開始時から「お宝シラバス」を併用して、研修を再編して実施したい。
- ・お宝シラバスに「導入の仕方」と「練習」の箇所を加えてゆきたい。

2. 清風情報工科学院 日本語科

2. 1 概要

期間：2019年8月～2019年12月

対象：日本語教師（専任）

人数：7名

日本語教師歴 専任10年から1年

ねらい：教師の学び直し研修ビデオを使い、新たな教授法を各自が取り入れられるよう、本研修を実施した。

概要：昨年度までに制作した研修ビデオのリストを教師に提示し、各自が気になるものを視聴する形で研修した。

2. 2 結果

受講生からのコメントを示す。このコメントの評価を併記した。

(1) 研修ビデオ タイトル：「場面→意味→かたち」①

- 1 意味から入って、形を学習者に考えさせながら進めて、まとめとして、形を板書しながら復習するので、暗記と練習のみにならないところが、良いと思いました。
- 2 私の授業は、時間に追われて、使う練習を追い立てるようになってしまうので、考えながら、もう少しゆったり進めてもいいかと思いました。

評価： 文型によっては、「場面→意味→かたち」の展開がよいことがある、という視点からずれている。

(2) 研修ビデオ タイトル：「場面→意味→かたち」①

- 1 「かたち」の導入をするのが遅く、それを入れる前にリピートさせるような練習には無理がある。
- 2 カタカナの未習語彙の使用が多く、新文型の習得に集中できない。（スーパーマン、ペンギン、チェンジなど）

評価： 文型によっては、「場面→意味→かたち」の展開がよいことがある、という視点からずれている。この講師の現場では、英語圏の学習者が相手なので外来語の利用により理解が促進される、という想像が働いていない。

(3) 研修ビデオ タイトル：マイ漢字ーkanji danceー

- 1 非漢字圏の学生に対して、このように体全体で漢字を書くという練習は有効だと思いました。
- 2 理屈で覚えこませる指導と違って、感性を働かせることによって、漢字に親しみ漢字を好きにさせたいというのがねらいだと思います。

評価： 研修ビデオが期待した見方がなされている。

(4) 研修ビデオ タイトル：マイ漢字

- 1 非漢字圏の学生にとって、漢字に初めて触れる際の取っ掛かりにはいいのかもしれませんが、漢字嫌いににならないように、という意味ではいいと思いますが、これで漢字が覚えやすいとか定着しやすいとは思えません。
- 2

評価： 研修ビデオが期待した見方がなされている。2は、ビデオ内へのクレーム。

(5) 研修ビデオ タイトル：みんなの日本語会話の進め方（一例）

- 1 「みんなの日本語」練習Cの扱いは難しく感じていましたので、活用したいと思いました。
- 2 まずDVDを見せてから、会話が口をついて出るまで練習することで、定着しやすいと思います。

評価： 研修ビデオが期待した見方がなされている。

(6) 研修ビデオ タイトル：みんなの日本語会話の進め方（一例）

- 1 DVD、CD プレーヤー、絵カード等、使用するものが多いので慣れが必要だと思いました。
- 2 クラスのレベルによっては複数回聞かなければ理解できないし、リピートもたどたどしいので会話を成立させるまでの時間配分も注意が必要だと思いました。

評価： 1は当然のこと。2も当然のこと。研修ビデオにおいて、重要であることに絞って言及しているが、そこから漏れたことへのコメントになっている。

(7) 研修ビデオ タイトル：ウタカラ て形うた 1-a ます形

- 1 意味のわからないまま、歌だけ先に歌えるようになるなら、それもアリだと思いました。
- 2 学習者を子ども扱いしているような印象を受けました。

評価： て形の変化を理屈抜きで丸覚えしておき、それと並行してルールを覚え、この両面から学習する、という想像ができていない。

(8) 研修ビデオ タイトル：語彙を覚えるのはゲーム感覚で

- 1 語彙導入にはあまり時間をかけられないのが現状だが、自習をあまりしない学生が多いクラスではいいかも。

評価： 研修ビデオが期待した見方がなされている。

(9) 研修ビデオ タイトル：中級文型の導入

- 1 導入にも練習にも無駄がなく、大変わかりやすい。
- 2 板書の字が小さくて見えない。自分の授業でも板書には気を付けたい。

評価： 研修ビデオが期待した見方がなされている。2は、ビデオ内へのクレーム。

(10) 研修ビデオ タイトル：「口頭練習の技術(2) 変換ドリル(1) 3桁の数字の教え方」

- 1 3桁の数字で「ひゃく」が「びゃく」「ぴゃく」となることを、色分けして視覚的に分かり易く導入するのが印象に残りいいと思いました。
- 2 学習者の国籍にもよりますが、注意が足りず、つい英語が出る自分が自分にもあり得るので注意しなければならないと思いました。

評価： 研修ビデオが期待した見方がなされている。2は、ビデオ内へのクレーム。本ビデオでは英語による間接法が前提となっており、英語が出ることは問題ではない。

2. 3 考察

(1) 研修ビデオの提示方法

研修実施側が期待した研修ビデオのシリーズでの視聴を行ったものではなく、それぞれの興味にもとづいて、単体のビデオを見るという形に終始した。このため、ビデオの提示方法に問題があると判断し、主要なビデオについて、視聴順などを明示し動画のサムネールを付けた研修テキストを作成することとした。この研修テキストについては、次節で述べる清風情報工科学院日本語教師養成講座向けの研修にて検証した。

(2) 研修ビデオの見られ方と研修効果

研修ビデオへのコメントを見ると、研修の効果を生んでいるコメントがある一方で、研修ビデオの内容への疑問をなげかけたり批判的なコメントや、研修ビデオの主題とずれたことへのコメントも多い。

対話的な研修環境においては、視点がずれている、背景はこうであるから問題がない、などのやりとりによって、受講生の視点のずれを修正し、研修目的に誘導することは可能であろう。

ビデオ単独によって、この種のずれを修正する場合、

- ・ビデオの長さを増やし、背景説明などを追加する
- ・収録にあたってのチェックポイントを増やした上で、プロの俳優が収録する

という必要がある。しかし、このアプローチでは

- ・長時間のビデオ視聴が必要になる
- ・収録のコストも時間も多くかかることになる

ため、

- ・短時間のビデオ視聴により効率的に学習をすすめる
- ・収録にコストをかけず教育ノウハウを交換する

という目的には反してしまう。

(3) 総合評価

日本語教師は職人の世界であり、特に特殊な教授法に準拠した学校でなく、「みんなの日本語」などの一般的な教材を用いる学校では、教材の完成度が低いだけに各日本語教師の独自の技やクセに各自がプライドを持ち、それに反するものを排除する雰囲気が生じやすい。

これらのことから、ビデオ単独での日本語教師の研修は、成立にかなりの困難があると結論づけた。

3. 清風情報工科学院 日本語教師養成講座

3. 1 概要

期間：2019年8月～2020年2月

対象：日本語教師養成講座講師

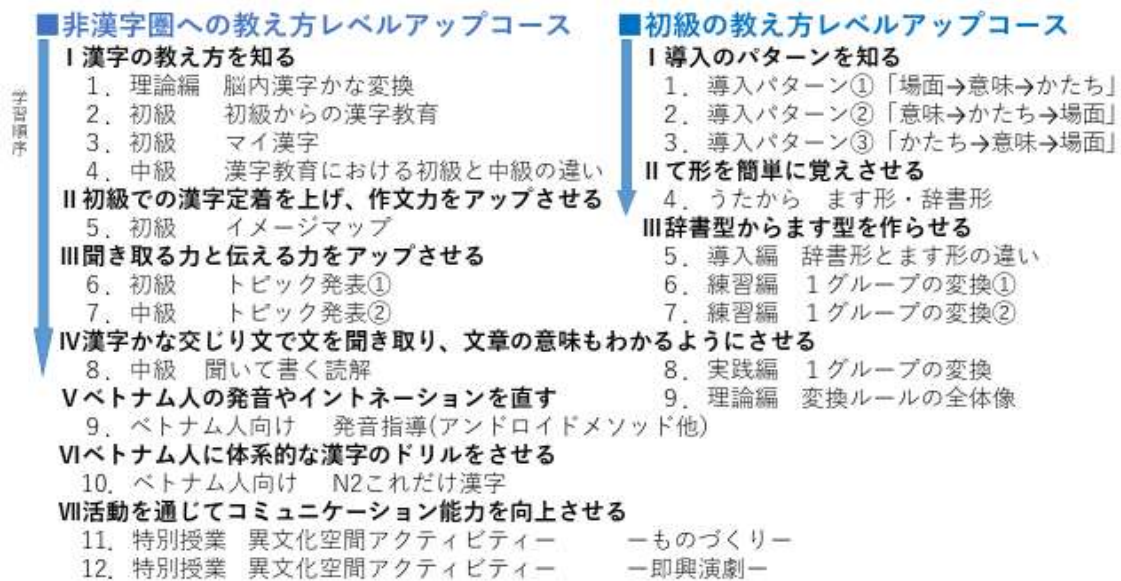
人数：3名

日本語教師歴 10年から20年

日本語教師養成講座教師歴 7年から2年

ねらい：日本語教師養成講座のカリキュラム改変にあたり、講座が抱えていた問題の解決と、eLearningの取り入れの方法の評価および、教師の学び直し研修ビデオの活用法の検討のため、本研修を実施した。

研修内容：eLearning併用型日本語教師養成講座のカリキュラムおよび、今年度制作した研修ビデオの受講テキストを教師に提示して研修した。



3. 2 結果

3名の養成講座講師による評価は、その評価ポイントがそれぞれ異なっていたが、それぞれ有益であるので、それを示す。

(1) ビデオの総評

a. A講師の評価

全体としての感想は、ブラッシュアップのための教材として非常に有意義で、どのような立場の先生にも見て頂きたい感じる内容だった。私自身も多くの気づきがあった。養成講座にも組み込めそうな内容ばかりだと思うが、日本語教育に関する知識が全

くない状態でこの内容を視聴するよりも、実感を伴う知識を得たタイミングでの視聴の方が効果的ではないかとも感じた。

b. B 講師の評価

養成講座の受講生は自ら受講料を捻出している方がほとんどで、講師側の服装、口調にとっても厳しく、敏感に反応し、その都度申し出してくることと、直接法の勉強をしているのに、なぜ、間接法の MISJ を入れているのか、と何度も質問があった。養成講座の授業内で使えるかどうか、を視点に感想を述べる。

c. C 講師の評価

ビデオを見て感じたことは、知識や技術の紹介がされていて出ていて参考になることはいろいろありました。ただ、このままでは養成では使いにくいと思いました。わかっている人が見れば通じる話なのですが、もう少しゆっくりとしたスピードで視覚的なものも使いながら説明する必要があると思います。

(2) 非漢字圏への教え方レベルアップコース

①脳内漢字かな変換

a. A 講師の評価

感想・気付いた点

- ・漢字の習得を新しい視点から考えられた非常に興味深く効果的な教授法であると感じました。

養成講座の視点から

- ・ネイティブと学習者の脳内の動きを比較する内容が最初に提示されているので、養成講座の受講者さんが学習者の考え方を理解する助けにもなるので、漢字学習以外の授業に関しても参考になると感じます。

- ・受講者さんから「実際の授業で行う際に、母語が異なる学習者が混在するクラスでの運用」や「具象化出来ない項目」についてどのように扱うかについて質問が出ると予想されます。

- ・養成講座の受講者さんはシニア層の方が一定数含まれるので、この動画に入っている効果音に違和感を覚える方がおられるのではないかと感じました。

カリキュラム表の番号

64 番 又は、コースの最後に。

b. B 講師の評価

養成の授業内ではこんなに漢字の時間は丁寧にできない。しかし「訓読み」は中国人

でも知らないなので、さらっと紹介するのなら良いと思う。

研修ビデオ内の演出効果については、若年層の受講生だけでなくシニア層の受講生をも想定した演出にする必要がある。

②初級からの漢字教育

a. A講師の評価

感想・気付いた点

- ・筆ペンを用いた学習法は学習者が喜んで練習する様子が目に浮かびますし、ペンや鉛筆では理解しにくい「とめ」や「はらい」の書き方が自然に身に付くという点でも良い練習法だと感じます。
- ・漢字を書く練習にとどまらず、漢字の使用についても（学習者が主体となって）同時に行っていく授業展開も素晴らしいと思います。
- ・8分18秒あたりの「つぶやき手習い」の①「教師が擬音をつぶやきながら体~~を~~（→ビデオの文字が「を」になっています）「はね。とめ、はらい等」を演じる」という部分が分かりにくかったです。書くのではなく、体で表現するという意味でしょうか？空書でしょうか？

養成講座の視点から

非漢字圏の学習者の指導で、漢字の形の習得だけでなく「とめ・はね・はらい」にも注意を払うような練習法を意識してもらうためにも良い教材だと感じます。

カリキュラム表の番号

64番 又はコースの最後に

b. B講師の評価

聞きとりづらい。低い声であるのが原因だろうか。また養成講座で「WO」はウォとは教えず「を」と発音している。ビデオ内でも同様の発音にしてもらいたい。

③マイ漢字

a. A講師の評価

感想・気付いた点

この内容と前の項目の「つぶやき手習い」の違いが分かりにくいので、やはり「つぶやき手習い」の説明がもう少し詳しい方が良いのではないかと感じます。

養成講座の視点から

受講者さんの中には、日本語の授業のイメージがあまり無い方もいらっしゃると思うので、このような「体を動かす練習法」なども取り入れ、楽しく学習者をその気

にさせるような手法も有るという事を示すという点でも参考になる動画だと感じます。

カリキュラム表の番号

59・64

b. B 講師の評価

受講生か留学生が入っているといいのだが。

T シャツの胸元が開いているとクレームが出る可能性がある。

④漢字教育における初級と中級の違い

a. A 講師の評価

感想・気付いた点

学習者にとって、漢字学習のどのような点がネックになっているか具体的に示されていて、理解しやすいです。

養成講座の視点から

この内容は養成講座でもそのまま使用できそうだと感じました。

カリキュラム表の番号

64

b. B 講師の評価

この内容はパワーポイントの画面だけだが理解しやすい。

養成の中で、時間を取るの難しい内容。それより、一つでも教案を書いて模擬をしてFB したいからだ。

⑤イメージマップ

a. A 講師の評価

感想・気付いた点

・マップを作成しての学習方法は、どのレベルの学習者でも取り組むことが出来るので、手軽でありながら学習者の達成感を得やすい良い方法だと感じます。

・2分56秒ぐらいから、音声の説明と画面のスライドが一枚分ズレています。

養成講座の視点から

養成講座においても実際に体験しながら学べる方法だと思います。

また、語彙の学習や作文の構想でもマップを用いた学習が出来ることも併せて紹介できそうです。

カリキュラム表の番号

59

b. B 講師の評価

人物がないので、とてもよい。しかし養成の中で、時間を取るの難しい内容。それより、一つでも教案を書いて模擬をしてFB したいからだ。

⑥トピック発表①

a. A 講師の評価

感想・気付いた点

・54 秒の「継続的に改善していけること」とは「何について」かが分かりにくいです。

・3分からの「教師の役割」についてで「原稿チェック、文法ミスは指摘しない」という部分ですが、事前に原稿チェックをしないと、聞いている学習者に伝わらない場合も有ると思うのですが、その点はどのように運用されているのでしょうか。

養成講座の視点から

養成講座でこのような活動を紹介するのは非常に意義が有ると感じます。教師は「教え込む」存在ではなく、学習した内容の運用をサポートする存在になるという意識が重要だと思いますので、是非、この様な内容は入れていきたいです。

カリキュラム表の番号

44? または該当無し

b. B 講師の評価

新任講師の研修のなかで見せるべき内容。養成講座では教壇実習が終わって、総括の中で少し扱うことが出来ればよい、という内容。

⑦トピック発表②

a. A 講師の評価

感想・気付いた点

グループで発表を行った後に全体の前で発表するという方法は本当に良いと思います。聞いているメンバーもグループで内容確認を行うなど、学習者が自然に話し合える展開になっている点も素晴らしいと感じました。

養成講座の視点から

アクティブラーニングの視点から、この様な活動の有効性と学習者の自発的な取

り組みについて考える時間を取るべきだと感じます。

カリキュラム表の番号

44?または該当無し

b. B 講師の評価

新任講師の研修のなかで見せるべき内容。養成講座では教壇実習が終わって、総括の中で少し扱うことが出来ればよい、という内容。

⑧聞いて書く読解

a. A 講師の評価

感想・気付いた点

・聞いて書く課題の文章にカッコや矢印が入っているのがユニークだと感じました。漢字かな交じりで聞く、という視点も興味深いです。実際の生活や大学の授業で必須のスキルだと感じます。

・4分割のA3用紙のそれぞれの部分に何を記入するのかが分かりにくいです。②～④にはどの時点で何を書いていくのかについて、もう少し詳しい説明があると分かりやすくなると思います。

・課題文をメッセージで配布するのはどうしてなのか、意図が分かりませんでした。完成文をプリント配布することとの違い(意図するところの違い)の説明を入れて頂ければと思います。私個人としては、授業内でスマホを活用して双方向の授業展開を行う事に興味がありますので、メッセージを利用した授業展開にも興味があります。しかし、この活動の場合、特に非漢字圏の学習者にはスマホの画面上よりもプリントで見の方が字形も確認しやすいのではないかと感じました。

養成講座の視点から

一つの課題に対して、色々な活動が組み合わされている点が非常に参考になると感じます。

コースの後半か、最終版に組み込めると有意義だと感じます。

カリキュラム表の番号

75?

b. B 講師の評価

なし

⑨、⑩ ベトナム人への指導

a. A講師の評価

ベトナム人学習者を指導する際に非常に参考になります。発音、漢字の指導には特に苦労する点であるため、実際にベトナム人を指導した経験がある教師にとっては役立つ内容であると感じます。反面、ベトナム人を指導した経験が無い養成講座の受講者さんには少しピンとこない部分も有るのではないかと思いますので、ブラッシュアップの機会に視聴するのが効果的ではないかと思います。

b. B講師の評価

実際にベトナム人学習者が周りにたくさんいるのに、日本人が無理をして真似る必要はない。実際のベトナム人の発音を聞かせたほうが、受講生はイメージを掴みやすいと思う。

⑪、⑫ 異文化空間アクティビティー

a. A講師の評価

外部の人と交流を持つ活動は、学習者の自信を付けさせる上でも、自発的な言語活動を生み出させるという点でも有意義だと思います。また、演劇的手法も非日常的な活動をする上で学習者の日頃は見えない面が見えたり、活躍の場が出来たりするのではないかと思います。

日本語学校によってはカリキュラムの都合で実際にこのような活動を行う事が難しいかも知れませんが、このような活動を意識した学習計画を立てることは有意義であると考えます。

b. B講師の評価

なし

(3) 初級の教え方レベルアップコース

a. A講師の評価

養成講座の受講者さんにとって、参考になる動画だと思います。

カイ日本語スクールの大山先生の動画を模擬授業の前に視聴する事で、授業の雰囲気や掴めそうですし、岩崎先生の動画は説明が詳しく、理解しやすいので初心者にピッタリだと思いました。

b. B講師の評価

カイ日本語スクールの先生の例文「子供の時、バレエをしていました」は、留学生や受講生の日常と乖離があるのではないか。(受講生によっては、フィットするとは

思うが)

この様な例文提示も受講生にとってはビデオがそう言っていた、先生がそう言っていた。になるので注意が必要。

先生だけのショットではなく、実際に教室で学生とやり取りしている姿を見せたほうが、受講生にとってイメージを掴みやすい。

(4) カリキュラム案について。

a. A講師の評価

このカリキュラム案では、座学の一部を演習の担当者が受け持つという案なっています。その意図は「理解しやすくなる」という事だと理解しましたが、従来通りの方法とどのように理解の差が出るのかという点がイメージ出来ませんでした。時間が無く、ご質問出来なかつたので、次回の会議の際に、授業の内容をどのように変更するのもお伺いできればと存じます。

演習部分に関しては、大きな枠の⑬の内容と、現行の毎週の初級の模擬授業を並行して行うのかどうかという事、中級と初級を並行して行わないのであれば、現行の内容よりも模擬授業の回数が減りますので、その点をどう考えるか、という事が気になる点です。

b. C講師の評価

eラーニングには賛成しかねますが、流れには逆らえないのと確かにメリットもあると思い作業をしています。

これを参考にして清風独自の養成講座用ビデオを時間をかけて作成するのだと思います必要項目を洗い出しました。

初級 指導 聴解

・みんな 副教材 使用時

メインテキストと連動してない

・教材での指導時

「聞くだけ」ではもったいない

(時間的)余裕がある時にできること

初級「書く」

・初期 → 中期 → 作文へ

↑ ↑ ↑

1行(例文作りなど) 複数行 段落のあるもの

・フレームを使った作文作り

(QA に答えれば、作文ができあがる)

- ・よりよい作文のためのテクニック

板書

- ・大きい黒板・VS 小さい黒板
- ・板書計画
- ・板書分割
- ・ルビ
- ・板書の際の注意点

教師の発話

- ・文型導入の時
- ・ドリルの際のスピード変化
- ・指名
- ・褒める

初級 数にまつわる指導

- ・提出 順序 確認
- ・桁数
- ・学習者にとって何が難しいか
- ・効果的な練習あり (口頭・プリント)

初級 発音指導

- ・音 リピート
- ・拍 シャドーイング
- ・イントネーション 聴解 (耳を鍛える)
- ・ポーズ
- ・表情

訂正の方法

- ・文型指導時
- ・宿題のテストの FB の時
- ・コミュニケーション優位の学習時

教案作成

- ・目的

- ・必要項目
- ・サンプル(形成面)
- ・サンプル (内容面)
- ・注意事項

初級の文型指導 AL 法 (例 みんな日)

全体の流れ

- ・導入
- ・規範整理
- ・基本練習
- ・応用練習
- ・発展

初級文型指導 (AL 法 みんな日)

- ・導入ですべきこと
- ・文型による効果的手法
(バリエーション)

初級文型指導 (AL 法 みんな日)

- ・ドリルの紹介
- ・種類と目的
- ・単純ドリル
- ・負荷ドリル
- ・ドリルの際の注意事項

初級文型指導 (AL 法 みんな日)

- ・応用練習

初級の文型指導

- ・発展的活動
- ・初級のできるタスク／アクティビティ
- ・定着のための工夫
- ・指導時の注意点

初級 活用語の指導 (例 みんな日)

- ・動詞 提出順序の確認と初級での指導文型

- ・て形指導の前のグループ別は指導
- ・フォームの指導（ITC 使用・アナログ環境）
- ・形容詞の指導

初級 会話

- ・コミュニケーション力を高める活動
- ・練習 会話のページ
- ・場面や機能中心の会話
- ・位相

3. 3 考察

(1) 研修ビデオの提示方法

主要なビデオについて、視聴順などを明示した研修テキストを用いて研修した。これにより視聴はなされたので、この提示方法は効果があることが確認できた。

(2) 研修ビデオの見られ方と研修効果

研修ビデオへのコメントを見ると、研修の効果を生んでいるコメントがある一方で、研修ビデオの内容への疑問をなげかけたり批判的なコメントや、研修ビデオの主題とずれたことへのコメントも多い。また研修ビデオの内容を踏まえて、実際の実施方法などを問うコメントもある。

これは、この研修ビデオを対話的環境で利用すべきであるということを再確認させるものである。

一方で、「実際にベトナム人学習者が周りにたくさんいるのに、日本人が無理をして真似る必要はない。実際のベトナム人の発音を聞かせたほうが、受講生はイメージを掴みやすいと思う。」というのは、理解できる。しかし、実際のベトナム人の発音を聞かせることはその場のアドリブになり、常に同じ現象を再現できるわけでない。アドリブに頼らずとも講座側が示したいことが示せていれば十分である。

また、「先生だけのショットではなく、実際に教室で学生とやり取りしている姿を見せたほうが、受講生にとってイメージを掴みやすい。」というのも理解できる。しかし、実際に教室で学生とやり取りしている姿を見せるのは、収録が大変で、何度も撮り直すことになる。コストと効果の兼ね合いの問題である。

なお、デフォルメされたアニメ声や過剰な効果音は養成講座向きではないとの評価は検討に値する。TPO の問題であるからだ。

(3) 研修ビデオを養成講座の教材として利用することの可否

これについては、意見は分かれている。ほぼ全面的に利用できるし利用価値があるとす

る講師がいる一方で、否定的な講師もいる。非漢字圏への教え方レベルアップコースは、アクティブ・ラーニング手法を取り入れていることもあり、その事への反発もあるかもしれない。一方的に教え込むスタイルの教師にとっては、受講生に考えさせ自分のやり方を模索させるやり方に抵抗がある可能性が高い。

また、研修ビデオの内容によっては、養成講座段階ではなく、日本語学校に採用後実際の授業の経験をしてからのほうが理解が深まるものもある。どれを養成講座段階で利用するかについては、講師間でオープンな議論を行い決めてゆく必要がある。

養成講座において、どのような知識・技能を習得させるのか、そのための方法は何なのかについて、意思統一が必要である。その上で研修ビデオを位置づける必要がある。

(4) eLearning 併用型日本語教師養成講座カリキュラムにおける研修ビデオの体系

養成講座内で用いる研修ビデオは、大きく分けて2種類に分かれる。知識を習得させるためのものと、イメージをふくらませるためのものである。後者は、教室での言葉による提示よりも動画化されているほうがわかりやすいもの、また、現場におけるアドリブの偶然性に依存度を減らすためのものである。

今回の検討では、この違いについてはまだ議論は不十分である。しかしながら、現場からビデオの内容についての提案があり、カリキュラムで想定しているビデオの内容を具体化し、それらを突き合わせることで有意義な教材が生み出される可能性がある。

(5) eLearning 併用型日本語教師養成講座カリキュラムの全体像

カリキュラムの全体像については、さほど大きな反応はない。従来のカリキュラムに問題があったことは講師間の共通認識でもあったため、肯定的にとらえられたと判断する。

講師から寄せられたコメントは、養成講座内の模擬授業の体系がどのように変化するのか、ということに集中している。これについては、この体系をより具体的に指し示し、その上ぎ議論する必要がある。

また、「座学の一部を演習の担当者が受け持つという案なっています。その意図は「理解しやすくなる」という事だと理解しましたが、従来通りの方法とどのように理解の差が出るのか」との疑問については、より具体的に議論する必要がある。

4. 考察

3つの実証講座の結果について、考察した。

(1) 運営モデル

- ・ビデオだけで成り立つ講座は無理がある。NHKのテレビ講座のように映像にコストをかけることもできない。例えそうして品質を高めたとしてもなお無理がある。ただ、Youtuberなどがオンライン講座をしていて一部成り立っている。このモデルで実施する場合は、受講生との共感を全面的に打ち出す必要があるだろう。
- ・ビデオがメインの講座も無理がある。放送大学の講座のように映像は長尺化しコストをかけ、単位取得などのしぼりを生じさせる必要がある。通信講座を実施する場合は、単位取得などのしぼりが必要であろう。
- ・実効性のある日本語教師の学び直し研修には
現場のリーダーシップ + やってみせ + やらせて + フォロー
が必要である。講師と受講生の上に信頼関係の成立が必要ということである。これを前提として、運営モデルを考える必要がある。ビデオのみ形態ではこの関係が成立しづらい。対話的な研修の場を前提とし、その上で研修ビデオの利用を考えるべきである。
- ・対話的な研修の場があり、その中で研修ビデオを補完的に使うのは可能である。この場合、研修ビデオの長さが短く内容に多様な解釈が生じたとしても、対話的に軌道修正が可能である。研修の実施において、何度も説明が必要なことや自らが説明せずとも説明が可能なることを研修ビデオ化しておくことや、説明するよりも見せたほうがわかりやすく毎回同じように見せられるかどうか偶然性に依存するようなものはビデオ化しておく価値は高い。
- ・研修ビデオを補完的に使う場合、研修カリキュラムを調整することができれば、研修のための教室の専有時間を減らすことができるかもしれない。但し、同じ曜日の同じ時間帯に教室を開ける必要がある場合、カリキュラムの調整をシビアにする必要がある。また、この方式であれば、教室を開けるべき時間帯を担当していた講師は、eLearning化により仕事を失うことになる。担当講師がeLearningコンテンツから講師料が得られる仕組みを同時に考える必要がある。
- ・講師と受講生の上に信頼関係が存在する場合、対話的な研修の場そのものをインターネット上に展開するということが可能である。別の言い方をすれば、対面授業の空間を拡張するためにIT技術を利用するということである。この場合、特別な動画コンテンツが必須であるわけではなく、通常の研修をオンライン上で実施することで講座をeLearning化することができるということでもある。

- ・新しい教授法を普及するためのチャンネルは、
人 + 教材 + ビデオ + サポートコミュニティ + 学習コミュニティ
があるのが理想的である。この成立を目標に、運営モデルを考える必要がある。

(2) 研修カリキュラム

- ・繰り返し研修ビデオを見て、授業で実践し、主任からフィードバックをもらうことができ、授業を改良できた。
- ・主任と対話形式で行うオンライン研修により、授業法についての気づきを得て、授業を改良できた。また主任に質問して、直接アドバイスを受けられる良い機会となった。
- ・お宝シラバスを参考にすることで、教案づくりの時間が大幅に短縮できた。また授業に組み込めるお役立ち情報が多く記されていて大変便利であった。関連課の記載も役立った。
- ・授業後すぐ教案を自分で再チェックし、自己評価を行う。そしてそれを主任に提出する。これを繰り返すことにより、教師は自分の授業を客観視する視点ができる。
- ・研修を受ける教師は教案を自分で改良する技術が付き、授業のやり方も向上していった。効果的な研修方法を見いだせた。
- ・主任は、研修を受けている教師の熟練度の差を正確に把握し、相手の理解度を踏まえた上で、アドバイスをしなければならない。
- ・主任は、教案や授業日誌を共有させられなければならない。またそれを学内のデータとして構築していなければならない。
- ・この研修は教師間のリスペクト、つまりお互いに教育者としての信頼関係があり成り立つ研修であることがわかった。
- ・「お宝シラバス」は、大切なポイントを簡単に確認できる便利なシラバスであり、学生に無駄な説明をしなくなるシラバスであることが確認できた。

(3) 養成講座カリキュラム

- ・従来の養成講座カリキュラムに問題があったことは講師間の共通認識であったため、新しいカリキュラムは肯定的にとらえられた。
- ・講師の興味は養成講座内の模擬授業の体系がどのように変化するのか、ということに集中している。模擬授業の体系をより具体的に指し示し、その上で議論する必要がある。
- ・「座学の一部を演習の担当者が受け持つという案になっている。その意図は「理解しやすくなる」という事だと理解したが、従来通りの方法とどのように理解の差が出るのか」との疑問については、より具体的に議論する必要がある。
- ・養成講座において、どのような知識・技能を習得させるのか、そのための方法は何なのかについて、意思統一が必要である。アクティブ・ラーニング手法の取り入れ方についてもコンセンサスが必要である。その上で研修ビデオを位置づける必要がある。

- ・ビデオ化すべき優先順位の高い項目は、イメージをふくらませるためのものと知識を習得させるためのものである。しかし、この違いについては議論は不十分である。カリキュラムで想定しているビデオの内容を具体化し、各講師のイメージを突き合わせる。このプロセスから、何のための eLearning 化なのかについて、合意を形成していく必要がある。

(4) 研修ビデオ

- ・研修ビデオは対話的環境で利用すべきである。対話的な研修環境においては、視点がずれている、背景はこうであるから問題がない、などのやりとりによって、受講生の視点のずれを修正し、研修目的に誘導することが可能だからである。
- ・主要なビデオについて、視聴順などを明示し動画のサムネールを付けた研修テキストを用いて研修した。動画のタイトルリストと内容を記したものでは視聴は促進されず、この提示方法により視聴はなされた。この提示方法の効果が確認できた。
- ・研修ビデオの内容によっては、養成講座段階ではなく、日本語学校に採用後実際の授業の経験をしてからのほうが理解が深まるものもある。どれを養成講座段階で利用するかについては、講師間でオープンな議論を行い決めてゆく必要がある。
- ・研修ビデオ内の演出効果については、若年層の受講生だけでなくシニア層の受講生をも想定した演出にする必要がある。
- ・研修ビデオ内の語彙や例文については、日本語学校の学生に合わせた語彙や例文となるが、学生像を想定しておく必要がある。
- ・実際に教室で学生とやり取りしている姿を見せるのは、収録が大変で、何度も撮り直すことになる。コストと効果の兼ね合いの問題であり、程々のところで講座側も受講生側も満足する必要がある。
- ・ある学習項目を実際に話したり見せてもらったりすることは、講師以外の人に一期一会のアドリブを依頼することでもある。ビデオでそれに代える場合、講座側が示したいことが示せていれば動画の目的は達している。完全な品質を求める必要はない。

(5) 受講生管理や評価方法

- ・日本語教師は職人の世界であり、特に特殊な教授法に準拠した学校でなく、「みんなの日本語」などの一般的な教材を用いる学校では、教材の完成度が低いだけに各日本語教師の独自の技やクセに各自がプライドを持ち、それに反するものを排除する雰囲気が生じやすい。
- ・教師は一般にプライドが高く、自分の教え方への注文は、自分自身の人格の否定ととらえて感情的な反発を呼びやすい。そのため、講師と受講生間の信頼関係が講座成立の必須条件である。受講生への評価は、自分の教え方への注文ととられて感情的な反発を招くリスクがある。

- ・そのため、受講生管理や評価方法について、一律の基準を設けてデジタルに評価するのはなじまない。対話的な研修の場を必須とする場合、その人間関係をベースに従来どおりアナログな評価を維持したほうがよい。

(6) コンテンツの管理

- ・ Google Classroom では、コンテンツは「トピック」という科目に相当する画面でグループ化し登録順などの順番で見せるリスト形式の提示のが基本的なコンテンツの提示方法である。さらに細かなグループ化は、授業コンテンツの中に複数の動画を埋め込むことのできる。この2種類以外の方法は、授業コンテンツに添付する動画内やドキュメント内に展開するより方法がない。
- ・ Google Classroom では、リスト形式で提示した授業コンテンツの並べ替え、「トピック」の並べ替えの操作がまどろっこしい。並べ替えのコマンドがない、複数選択できない、などの問題があるからである。API を使ってコマンドを設ける必要があるかもしれない。
- ・ 実証講座では、Google Classroom で可能なリスト形式で研修ビデオを提示した場合、受講生の反応はよくなかった。Google 検索で動画を検索した時のように、動画のタイトル、動画を代表する画像（サムネール）、動画内容のテキスト説明文、動画の長さの4項目が一覧できる必要があるのではないか。それによって動画をみる視聴者の動画視聴への期待を事前に調整させ、動画視聴時の満足度を高めることができる。
- ・ 研修ビデオコンテンツは、Youtube にアップし限定公開している。このコンテンツのアップにおいて、上記の4項目およびその動画の元ファイル、動画の URL を管理するデータベースが必要である。量が少なければ Excel ベースで問題はない。但し、動画の加工・編集を行う場合、それを一元管理するには、より複雑な Excel のファイルが必要になる。今の所、この編集・管理を行う有効な方法は見つかっていない。
- ・ Google Classroom 以外のフロントエンドとして、今回 PowerPoint 上や PDF ファイル上に展開した。これ以外の方法として、Google Slide 上や Google Spreadsheet 上に展開することを検証する必要がある。

Ⅲ. 校内研修型講座

1. 方針

実証講座の結果を踏まえて、初級の授業法を効率的に改善する学校内の研修講座を構築する。主として新人日本語教師に対して、「みんな日本語」の授業を実践しながら、OJTで授業力を効果的に向上させる講座である。これまでに制作した研修ビデオ、および、本年度開発した「お宝シラバス」を活用する。

カリキュラムは大きく2パートからなり、最初のパートは入社後の新人研修に相当するもので、2つ目のパートは授業に投入後のOJT研修に相当する。

この方法は、カイ日本語スクールにおける研修ビデオ活用の方法をヒントとして、平岡佳梨加委員がAMA日本語学校の教員研修において見出したものである。

(1) 目的

- ・新人日本語教師の授業力をアップする。
- ・単に知識を得るだけでなく、人の授業から気づき自分の授業にフィードバックできるようにする。

(2) 対象

- ・教壇にたった経験のない日本語教師（420時間養成講座受講済み）
- ・すでに教壇にたった経験のある日本語教師（420時間養成講座受講済み）
経験時間数はまちまち。百時間程度から数千時間。文化庁基準の初任・中堅

(3) コンセプト

- ・自分の授業に反映することを目的とする
- ・ひとそれぞれの気づきを尊重する
- ・研修ビデオで演じられる模擬授業は必ずしも完璧なものを見なさない
- ・授業見学に入る代わりに研修ビデオを見る
- ・研修ビデオを見て自らが気づくプロセスと、主任からポイントを指摘されるプロセスの両方を体験し、気づきを深める。見方が経験化できる、気づいた見方を実践してみる、実践できているか確認してもらう。これらにより、授業を見る目が養われ、同時に実践できるようになる。

2. カリキュラム

2. 1 ウォーミングアップ

(1) 概要

目標： 日本語教師間の信頼関係づくり
 自分の教授法に気づく
 よい教授法を取り込んで自分の教授法を改善する

対象： 初任教师

レベル： 初級

授業： メインテキスト

教育内容	時間数	研修ビデオ	備考
教授法の改善方法に気づく	6		
模擬授業の相互レビュー	2		
(授業実践)	(4~40)		
研修ビデオチェック	2	15	研修ビデオ15本(2017年度開発)
(授業実践)	(4~40)		
解説付き研修ビデオチェック	2	15	研修ビデオ15本(2017年度開発)
(授業実践)	(4~40)		

利用する研修ビデオ			
・導入の3パターン		3	2017年度開発
・ウタカラ3パターン		3	2017年度開発
・授業前の準備・教材研究		2	2017年度開発
・ウォーミングアップ		1	2017年度開発
・ドリルのポイント		1	2017年度開発
・会話の進め方		1	2017年度開発
・て形の定着		1	2017年度開発
・漢字の書き方		1	2017年度開発
・語彙の覚えさせ方		1	2017年度開発
・中級文型の導入		1	2017年度開発

(2) 方法

1回~3回目は集合研修、4回目は個人で学び直し講座の研修ビデオを見る。

集合研修において授業担当者は、ビデオ研修や他の講師たちのアドバイスから気づきを得、実践を繰り返す。主任が指導した専任からのアドバイスを聞き、教え方をさらに膨らませつつ、並行して個人学習でビデオの学び直し講座から再び学びを得、模擬授業改良(授業改良)を継続させる。

1回目　アイスブレイキング、出発点の共有

1. 模擬授業実施
2. 他の受講生&主任からのアドバイス⇒自らが気づきを得る
3. (授業実践)

2回目　授業見学の代わりに研修ビデオを見る

1. 皆で研修ビデオを見る
2. 気づきシート記入⇒提出
3. 模擬授業実施
4. 他の受講生&主任からのアドバイス⇒気づきを得る
5. (授業実践)

3回目　解説付きで研修ビデオをみて気づきを深める

1. 皆で研修ビデオを主任の解説付きで見る
2. 気づきシート記入
3. (授業実践)

すでに現場の教壇に立っている状態で実施する場合は、上の流れの () の部分に実際の授業の実践が入る。

2. 2 初級授業の改善

(1) 概要

目標： 非漢字圏学習者の弱点に対応したみんなの日本語の教授法を身につける

対象： 初任教师・中堅教師

レベル： 初級

授業： メインテキスト

備考： カイ日本語スクール大山先生の教案指導カリキュラムをモデルとして、「みんなの日本語」について研修プログラムとしたもの

教育内容	時間数	研修ビデオ	備考
みんなの日本語の教授法改善	114		
イントロダクション	6	18	ドリル訓練、導入パターン
(練習)	(10-20)	16	
1巡目			
研修ビデオと教案例の提示	2	6	導入パターン、非漢字圏向け教授法
授業の実施と自己評価	(300)		
教案指導1回目	50		
2巡目			
お宝シラバスの提示	2	6	お宝シラバス
授業の実施と自己評価	(300)		
教案指導2回目	50		
個別指導	(2)		※一人0.5時間、2巡目の途中で実施
まとめ	4		
利用する研修ビデオ			
ドリル訓練		16	2018年度開発
ドリル訓練		7	※※今年度開発
導入パターン		3	2017年度開発
非漢字圏向け教授法		12	2018年度開発
その他			
お宝シラバス			※※今年度開発

※ ()内は、研修を受ける日本語教師による実践部分。個別指導の部分は研修を受ける主任と受講側の両方にかかる時間で、受講側1名あたり0.5時間。上の表では、4名と想定した数字である。

※※ 研修の完成度を高めるため、今年度、ドリル訓練の研修ビデオを7本追加した。また、「お宝シラバス」を開発して追加した。

(2) 方法

a. イントロダクション

ドリル訓練の研修ビデオを見て、ドリルの方法について、気づきを得る。ビデオを参考に練習を繰り返す。スピードやタイミングの反射神経を養う。

また、3種類の導入パターンの研修ビデオを見て、教案づくりのヒントとする。

b. 「みんなの日本語」 1 巡目

1. 準備

①研修ビデオ（その課に対応した導入パターン、非漢字圏向け教授法、詳しくは次表を参照）を見て授業方法について主任と話し合う。

②教案の書き込み方を統一する。

2. 教案作成

①各自教案を作成する。

3. 授業実施

①教案を見ながら実施する。

4. 再チェック・自己評価

①教案を再チェックして修正し、授業を振り返って自己評価をする。

②授業前の教案（2-①）と授業後の教案（4-①）を主任に提出する。

5. 主任との話し合い

①主任は2-①と4-①を確認する。

②主任は教師にフィードバックする。

以下、2から5を各課について繰り返す

c. 「みんなの日本語」 2 巡目

6. 1-①で見た研修ビデオを再度見る。お宝シラバスの内容を確認する。授業方法について主任と再び話し合う。

7. 教案作成

①各自お宝シラバスの内容と研修ビデオの教授法を取り入れ教案を作成する。

8. 授業実施

①研修ビデオの教授法を取り入れ作成した教案を見ながら授業を実施する。

9. 再チェック・自己評価

①教案を再チェックして修正し、授業を振り返って自己評価をする。

②授業前の教案（7-①）と授業後の教案（9-①）を主任に提出する。

10. 主任との話し合い

①主任は7-①と9-①を確認する。

②主任は教師にフィードバックする。

以下、7から10を各課について繰り返す

d. まとめ

振り返りシートを利用して、1年間の成長を振り返る。どのような自己成長があったのかを確認する。さらに、研修ビデオによる気づき、お宝シラバスによる気づきを確認する。次年度の目標を立てる。

みんなの日本語の研修プラン

課	回	人	時間	時間	対応する研修ビデオ																備考			
					導入パターン			その他のビデオ																
					回数	教師数	主任	教師	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		13	14	15
1	2	2	0.5	6	1	1				1				1	1									10:「私」
2	2	2	0.5	6		1				1				1										
3	2	2	0.5	6		1				1				1										
4	2	2	0.5	6		1				1				1	1									10:「私の1日」
5	2	2	0.5	6		1	1	1	1	1				1										
6	2	2	0.5	6	1	1		1	1	1				1										
7	2	2	0.5	6	1	1		1	1	1	1			1								1		15:課外活動
8	2	2	0.5	6		1		1	1	1	1			1	1									10:「私のふるさと」
9	2	2	0.5	6	1	1		1	1	1	1			1										
10	2	2	0.5	6	1	1		1	1	1	1			1	1									10:「私の部屋」
11	2	2	0.5	6		1		1	1	1	1			1										
12	2	2	0.5	6		1	1	1	1	1	1			1										
13	2	2	0.5	6	1	1		1	1	1	1			1										
14	2	2	0.5	6	1			1		1	1													
15	2	2	0.5	6	1			1		1	1													
16	2	2	0.5	6		1	1	1		1	1			1										10:「休日」
17	2	2	0.5	6	1					1	1													
18	2	2	0.5	6		1				1	1			1										10:「私の趣味」
19	2	2	0.5	6		1				1	1													
20	2	2	0.5	6	1		1			1	1													
21	2	2	0.5	6	1		1			1	1													
22	2	2	0.5	6			1			1	1													
23	2	2	0.5	6			1			1	1													
24	2	2	0.5	6	1					1	1													
25	2	2	0.5	6	1		1			1	1											1		15:課外活動で行う
26	2	2	0.5	6	1					1		1												
27	2	2	0.5	6		1				1		1			1									11:「得意なこと」
28	2	2	0.5	6		1	1			1		1			1									
29	2	2	0.5	6		1	1			1		1			1									11:「出身国の私の部屋」
30	2	2	0.5	6		1	1			1		1			1									
31	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									11:「将来について」
32	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									
33	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									
34	2	2	0.5	6		1	1			1		1			1									
35	2	2	0.5	6	1	1	1			1		1			1									11:「出身国の季節」
36	2	2	0.5	6			1			1		1			1									
37	2	2	0.5	6	1	1				1		1			1									
38	2	2	0.5	6			1			1		1			1									
39	2	2	0.5	6			1			1		1			1									11:「日本に来てびっくりしたこと」
40	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									
41	2	2	0.5	6	1	1				1		1			1									
42	2	2	0.5	6			1			1		1			1									12:「日本語を勉強する理由」
43	2	2	0.5	6	1					1		1			1									
44	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									
45	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									
46	2	2	0.5	6	1		1			1		1			1									
47	2	2	0.5	6			1			1		1			1									
48	2	2	0.5	6	1					1		1			1									12:「子供にさせたいこと」
49	2	2	0.5	6	1					1		1			1									
50	2	2	0.5	6	1					1		1			1								1	15:課外活動

50 300 (時間)

主任の時間数は各課2回で、毎回0.5時間のため、合計50時間となる

(3) 利用するシート

a. 教案シート

「みんなの日本語」教案 初級Ⅰ第2版 課			
授業テーマ			到達度 学生 %教師 %
授業日:	年 月 日 ()	午前・午後 コマ	授業者:
目的			
到達目標			
指導ポイント			
準備			準備物
時間	学習内容・活動		指導上の留意点
導入	分		
展開	分		
まとめ	分		

b. 教案チェックシート

教案チェックシート みんな日Ⅰ・Ⅱ 課 氏名：			自己評価			
			3	2	1	0
1	授業テーマの理解ができている					
2	到達目標が適切である					
3	全学習項目において導入から練習までの流れが適切である					
4	時間配分が適切である					
5	導入					
	① 視点を変えた導入を複数準備している					
	② 理解の確認・発話をくみこんでいる					
6	発話					
	① 教師の発話に無駄がない					
	② 学生に十分な発話の機会を与えている					
7	練習					
	事前					
	① 応用の練習問題の準備ができている					
	② 想定される質問に対する対応準備をしている					
	教室活動					
	① ドリルが到達目標にリンクしている					
	② 練習内容が到達目標にリンクしている					
	③ 練習の指示や手順に無理がない					
	④ 応用力のある学習者が言った答えを肯定し、他の解答例として伝えられる					
	⑤ 学習者に対して答えられなかった質問をメモする					
	⑥ ⑤の答え（個別または次回）について教える時を伝えられる					
8	教授方法					
	本日の授業内容を理解させることができた					
			合計点			
授業終了時送信 yorikahiraoka@gmail.com (#.^.#)			総合計点			
			CC:			

c. 振り返りシート

- ① この一連の研修を通じて教師として何か変わったことはありましたか。
- ② 1年前、半年前、そして今ではでは、どのような変化がありましたか。
- ③ 研修ビデオを見たことで、授業方法が変わりましたか。
- ④ 変わった場合どのように変わりましたか。
- ⑤ お宝シラバスを見たことで、授業方法が変わりましたか。
- ⑥ 変わった場合どのように変わりましたか。
- ⑦ お宝シラバスは今後、どのように活用したいですか。

2. 3 カリキュラムおよび研修ビデオの提示の仕方

(1) 従来の提示の仕方

従来は、カタログ形式で研修ビデオを提示していた。タイトル、対象のレベル、目的、内容、関連論文、動画の時間数、動画の URL、関連論文の URL を示すものである。

実証講座で、主任が主体的にビデオを選んで受講生に提示したものでは受講が成立したが、受講生が主体的に選ぶ形では受講は成立しなかった。

この提示方式では、どれを選ぶべきなのか受講側には直感的な理解が得られず、とりあえずキーワードで気になったものを見るという形になる。内容への期待と見られるものとの間のギャップが大きく、興味が持続しないのではないかと考えられる。

日本語教師のための学び直し講座 2018					
学校	タイトル (分.秒)	学習者のレベル	目的	内容	論文
At	1 マイ漢字ーkanji danceー	初級	漢字	漢字の形への抵抗を減らした漢字の書き方の練習。はらい、まげ、はね等を身体や空書きを使い習得。	非漢字圏に向けた効果的な漢字教授法 ー漢字ストラテジーー
	3.54			https://youtu.be/IFNtPgQZZQA	http://bit.ly/2Q35Y6a
	2 脳内漢字かな変換	初級・中級	漢字	母語と漢字の形、日本語と漢字の形、発音と漢字の形、書く動作と漢字の形。これらを相互に変換できるようにする理論。	非漢字圏向け中級学習ストラテジー ー漢字圏向けとの違いー
	8.02			https://youtu.be/sGGUfBtOvk	http://bit.ly/2Uxo91W
	3 初級からの漢字教育	初級	漢字	漢字の形への抵抗を減らし、意味と読みを結びつける種	はねる、とぶ 筆ペンを

GoogleClassroom 上でも、同程度の表現力しかない。通常はタイトルのみが表示され、1クリックして始めて内容が表示される。動画を見るかどうか判断するのに1アクションさらに1アクションで視聴に至る。

授業力アップ アクティブラーニング

初・発音 発音指導 (アンドロイドメソッド...

最終編集: 2019/10/15

初級 発音 イントネーション アクセント
発音における母語の影響を最小限にする為にいったんロボットやアンドロイドのように話させる。その上で拍やアクセント、イントネーションを入れ直す方法。

はねる、とぶ 筆ペンを...
PDF

発音指導 (アンドロイド...
YouTube の動画 7分

[資料を表示](#)

初・漢字 マイ漢字ーkanji danceー

投稿日: 2019/09/27

初中・漢字 脳内漢字かな変換

投稿日: 2019/09/27

(2) 新たな提示の仕方

研修ビデオの学習順序を示し、研修ビデオの内容を示す説明文と代表的なチャートを同時提示法を見出して、実証講座で利用した。この方法の場合、主任の対話的な指導がなくともビデオの視聴が持続できた。

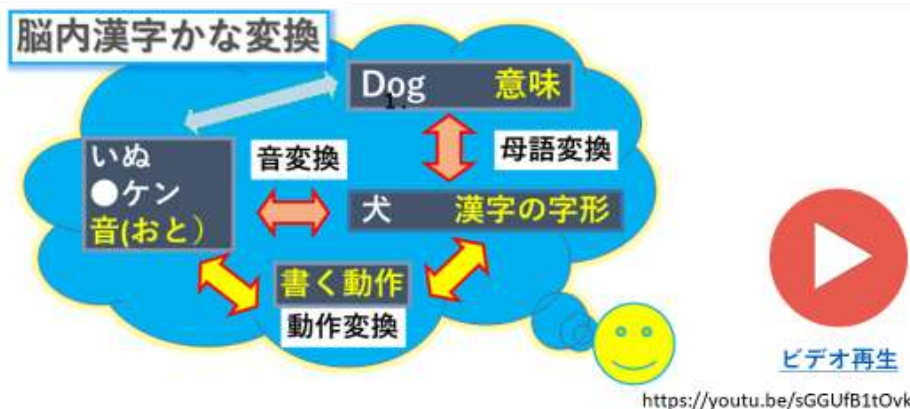
受講生が研修ビデオを体系的に理解できるだけでなく、受講生にとって内容への期待と見られるビデオの内容のずれが少なくなり受講生の満足度が比較的高いからではないか。

学習順序	<p>■非漢字圏への教え方レベルアップコース</p> <p>I 漢字の教え方を知る</p> <p>1. 理論編 脳内漢字かな変換 2. 初級 初級からの漢字教育 3. 初級 マイ漢字 4. 中級 漢字教育における初級と中級の違い</p> <p>II 初級での漢字定着を上げ、作文力をアップさせる</p> <p>5. 初級 イメージマップ</p> <p>III 聞き取る力と伝える力をアップさせる</p> <p>6. 初級 トピック発表① 7. 中級 トピック発表②</p> <p>IV 漢字かな交り文で文を聞き取り、文章の意味もわかるようにさせる</p> <p>8. 中級 聞いて書く読解</p> <p>V ベトナム人の発音やイントネーションを直す</p> <p>9. ベトナム人向け 発音指導(アンドロイドメソッド他)</p> <p>VI ベトナム人に体系的な漢字のドリルをさせる</p> <p>10. ベトナム人向け N2これだけ漢字</p> <p>VII 活動を通じてコミュニケーション能力を向上させる</p> <p>11. 特別授業 異文化空間アクティビティー —ものづくり— 12. 特別授業 異文化空間アクティビティー —即興演劇—</p>	<p>■初級の教え方レベルアップコース</p> <p>I 導入のパターンを知る</p> <p>1. 導入パターン①「場面→意味→かたち」 2. 導入パターン②「意味→かたち→場面」 3. 導入パターン③「かたち→意味→場面」</p> <p>II 形を簡単に覚えさせる</p> <p>4. うたから ます形・辞書形</p> <p>III 辞書型からます型を作らせる</p> <p>5. 導入編 辞書形とます形の違い 6. 練習編 1グループの変換① 7. 練習編 1グループの変換②</p> <p>8. 実践編 1グループの変換 9. 理論編 変換ルールの全体像</p>
------	---	---

I 漢字の教え方を知る 理論編

1. 脳内漢字かな変換

母語と漢字の形、日本語と漢字の形、発音と漢字の形、書く動作と漢字の形。これらを相互に変換できるようにする理論。



もっとも、このような提示方法は、GoogleClassroom 上で実現できない。将来的なバージョンアップに期待する。暫定的には、PowerPoint でページを作っておき、PDF に変換した

ものを受講生に提示するという方法が可能である。

現在の課題は、つくるのが煩雑であることである。代表的な画像の選択、レイアウト、理想的には、動画の長さも表示したいが今回は見送った。動画の URL をドロップすれば、定形部分（再生ボタン、ビデオ再生というキャプション、URL、これらから URL へのハイパーリンク）を自動生成するツールがほしい。

また、PowerPoint の代わりに、Google Slide または Google Spreadsheet を利用することで、作成環境と提示環境を同一にできるかもしれない。今後検討する価値がある。

3. 運営モデル

実効性のある日本語教師の学び直し研修には

現場のリーダーシップ + やってみせ + やらせて + フォロー
が必要である。主任と受講生の上に信頼関係の成立が必要ということである。対話的な研修の場を前提とし、その上で研修ビデオを利用する。

対話的な研修の場があり、その中で研修ビデオを補完的に使うのは可能である。研修ビデオの長さが短く内容に多様な解釈が生じる可能性がある。しかし、対話的に軌道修正が可能である。

主任と受講生の上に信頼関係が存在する場合、対話的な研修の場そのものをオンラインで展開することも可能である。オンラインの研修の場で、研修ビデオを視聴させ、受講生にオンライン上でコメントを求めたり指導したりすることも可能であった。

主任は、研修を受けている受講生の熟練度の差を正確に把握し、相手の理解度を踏まえた上で、アドバイスをしなければならない。

主任は、教案や授業日誌を共有させられなければならない。またそれを学内のデータとして構築していなければならない。

日本語教師は職人の世界であり、特に特殊な教授法に準拠した学校でなく、「みんなの日本語」などの一般的な教材を用いる学校では、教材の完成度が低いだけに各日本語教師の独自の技やクセに各自がプライドを持ち、それに反するものを排除する雰囲気が生じやすい。

教師は一般にプライドが高く、自分の教え方への注文は、自分自身の人格の否定ととらえて感情的な反発を呼びやすい。そのため、講師と受講生の上に信頼関係が講座成立の必須条件である。受講生への評価は、自分の教え方への注文ととられて感情的な反発を招くリスクがある。

そのため、受講生管理や評価方法について、一律の基準を設けてデジタルに評価するのはなじまない。対話的な研修の場を必須とする場合、その人間関係をベースに従来どおりアナログな評価を維持したほうがよい。

新しい教授法を普及するためのチャンネルは、

人 + 教材 + ビデオ + サポートコミュニティ + 学習コミュニティ
があるのが理想的である。この成立を目標に、将来的な運営モデルを考える必要がある。

IV. eLearning 併用型日本語教師養成講座

1. 概要

- ・これまでのノウハウをもとに養成講座については、養成講座の既存のカリキュラムを全面的に見直し、eLearning を組み込んだカリキュラムを作成した。初級では「みんなの日本語」、中級では読解および JLPT の対策が実施でき、かつ応用力がある人材に育つカリキュラムである。授業の配列や中身を見直し、さらに、学習者の学習効果や授業のメリハリを考えて eLearning を配置した。概ね、全体の 1 / 3 程度を eLearning 化できるというメドがついた。
- ・実証授業を通じて、既存の eLearning コンテンツの有用性を確認したが、同時に初級コンテンツの不足と、対面授業の部分を eLearning コンテンツ化する必要があることがわかった。初級コンテンツは最小限度で追加した。これらにより、事業終了後の講座開設の道筋が見えた。

2. 企画

2. 1 要件定義

(1) 背景

- ・教師養成講座は、開講から6年近く経過したが、当初の開講時のメンバーからの入れ替わりもあり、カリキュラムの趣旨がわかりにくくなっている。
- ・数年前に文化庁がカリキュラムを公定し、それに対応したものの、それまでの講座の趣旨を生かしたものにしたため、科目名と実態にずれが生じている。時間数も必要性に比べて過不足がある。
- ・ずれの部分は講師が補完していたが、講師の入れ替わりによって補完が働かなくなっている。
- ・受講生からのリクエストによって改善している部分もある。しかし、受講生の仕上がりから逆算すると講座には何らかの改善点があると考えられるがフィードバックが働いていない。講座全体を俯瞰して、改善をなすべきだがなされていない。

(2) 要望条件

- ・現在6コマの授業を展開しているが、教室運用の都合上、できれば、専有時間を4コマ分とし、2コマ分は反転授業などの形態でeLearning化できないか。
- ・感染症が拡大した場合、講師や受講生が登校できなくなる可能性がある。できれば、受講生は授業を自宅からでも受講でき、教師は自宅からでも講義できるようにできないか。
- ・この後、オンライン型の授業形態が増えると予想されるので、その時に物怖じしないようなスキルを身に付けさせておきたい。

(3) 解決すべき課題

- ・シニア層の受講生を中心に、スピーチコントロールができないまま講座を終了しているものがいる。
- ・形通りの授業はできるが、応用がきかない。
- ・模擬授業の際の受講生役が上手でないため、緊張感のある模擬授業になりにくい。
- ・理論編の授業の品質が一定でない。脱線が多いというクレームがつく。
- ・せっかく日本語科がとりにあるが、有機的な結合が難しい。授業見学などうまくできないものか。
- ・非漢字圏の教育に即した教育内容になっていない。

(4) 制約条件

- ・文化庁のカリキュラムの要件を満たす必要がある
- ・極力現在の講師が継続して講義できる形態にしたい

(5) 方法

清風情報工科学院の日本語教師養成講座を例に取り、この講座をリアル・オンライン・eLearning 併用型に転換することを考える。

ここで、「リアル」とは、教室に教師と受講生がおり、黒板を瀕にして教師が受講生に授業する形態をいう。「オンライン」とは、教室で行う授業をライブ配信して受講生が自宅から受講する形態をいう。教師が自宅から授業をライブ配信する形態も含む。「eLearning」とは、事前にためてある授業コンテンツ（研修ビデオなど）を配信して受講する形態をいう。

「併用型」とは、

教室に教師がおり、受講生の一部も教室にいて、授業が行われる。

この授業がライブ配信されており、一部の受講生は自宅から受講している。

この授業の中で、eLearning コンテンツを視聴・利用する。

または、リアル授業以外の時間に、eLearning コンテンツを視聴・利用する。

これら全体が統合された受講形態である。リアル・オンライン・eLearning 併用型を総称して「ハイブリッド型」という。

2. 2 既存のカリキュラムの概要

(1) カリキュラム (科目名及び科目毎の単位時間数等)

既存のカリキュラムは以下の通りである。区分については、(3) に示す文化庁のカリキュラムと対応している。

a. 全体

科目名	目標	内容	単位時間数	区分①～⑩	担当講師名	面接・放送
世界と日本	異文化コミュニケーションとその背景を理解する	グローバル化と人材活用、日本式ビジネス文化とコミュニケーションの特徴について学ぶ	6	①	石田	
	言語と社会の関係を理解する	諸外国の地域と日本、文明、教育、哲学、世界史、日本史、文学、芸術について学ぶ	6	①	清水	
	広い視野で日本語教師の仕事を探る	日本の社会と文化、国際関係、日本事情、グローバルスタンダード、社会習慣、時事問題から考える	15	①	友金	
異文化接触	留学生が直面している問題点を理解する	文化交流、留学生政策、研修生受け入れ政策、地域協力、留学生の精神衛生について学ぶ	3	②	福德	
	国際化に伴う人々の流れと問題点を理解する	国際協力、異文化適応・調整、人口の移動(移民・難民政策を含む) 児童生徒の文化間移動について学ぶ	6	②	石田	
	異文化に触れた際の学習者の言動からニーズを導き出す	留学生の満足度についてケーススタディで考える	3	②	福德	
日本語教育の歴史と現状	言語政策、国語教育と日本語教育との相違点を学ぶ	日本語教育史、日本語教育と国語教育、言語政策、日本語の教育哲学、日本語及び日本語教育に関する試験、日本語教育事情(世界の各地域、日本の各地域)について学ぶ	12	③	清水	
言語と社会の関係	社会人文化能力を磨く	社会文化能力、言語接触・言語管理、言語政策、各国の教育制度・教育事情、社会言語学・言語社会学について学ぶ	12	④	清水	
言語使用と社会	社会人としてのコミュニケーション能力を養う	待遇・敬意表現、言語・非言語行動、コミュニケーション・ストラテジーについて学ぶ	3	⑤	石田	
	言葉についての知識を深める	言語変種、語用論ルール、ジェンダー差・世代差、地域言語について学ぶ	12	⑤	清水	
言語習得・発達	言語習得過程、中間言語、コミュニケーションストラテジーを認識する	習得過程(第一言語、第二言語)、中間言語、二言語併用主義(バイリンガリズム)、ストラテジー(学習方略)、学習者タイプについて学ぶ	3	⑦⑧	加藤	
異文化理解と心理	多文化教育における国際理解と心理について学ぶ	異文化間心理学、社会的技能・技術(スキル)、集団主義、教育心理、異文化受容・適応、日本語教育・学習の情動的側面について学ぶ	6	⑥⑨	石田	
言語教育法	実践的知識を鍛える	実践的知識、実践的能力、自己点検能力、学習者情報、教育情報、誤用分析、教材分析・開発、教授法、評価法について学ぶ	45	⑩	中村	
	適切な授業、教具を用いて、導入、練習ができる	初級授業計画、教具(絵カード、文字カード)の作成、使用、語彙導入、ドリル、展開、会話指導について学ぶ	45	⑩	井藁	
	どのような指導が必要なのかを把握し授業を組み立てることができる	ニーズ分析、アクションリサーチ、レディネス調査、ポートフォリオ、シラバスについて学び、授業計画を立てる	15	⑩	井藁	
	クラス内で効果的な活動ができる	教室・言語環境の設定、目的・対象別日本語教育法、アクションリサーチ、グループダイナミクスについて学び、ロールプレイ、スピーチ、ディベート、ゲームなど効果的なクラス活動について考える	30	⑩	井藁	
	-実習(初級)	初級授業の概要を理解する	初級指導概要、初級テキスト概要、コースデザイン(教育課程編成)、カリキュラム作成、初級指導法(文字、語彙、文法、聴解、読解、発音、作文)を学ぶ	30	⑩	水田
	初級授業の準備と実践ができる	授業作成、導入の実践、練習の実践、コミュニケーション活動の実践、文字・語彙の活動、文法・文型の活動、聴解・会話の活動、模擬授業、フィードバックで授業の流れを学ぶ	30	⑩	加藤	
一実習(中上級)	中上級指導を理解し、授業準備と実践ができる	中級授業概要、中級指導法、授業作成、模擬授業、フィードバック、実践で学ぶ 上級授業概要、上級指導法、授業作成、模擬授業、フィードバック、実践で学ぶ	36	⑩	福德	

異文化間教育・コミュニケーション教育	多言語、多文化の中での学習者と教師の役割を知る	異文化間教育、多文化教育、国際・比較教育、国際理解教育、コミュニケーション教育、異文化受容訓練、言語間対照、学習者の権利について学ぶ	6	⑪	加藤	
言語教育と情報	教材選択から開発まで何をどのように教えるかを考え実践できるようになる	教材開発・選択、知的所有権問題、教育工学、学習支援・促進者（ファシリテータ）の養成について学ぶ	12	⑫	清水	
	授業周辺の業務を理解し技術を身につける	データ処理、メディア／情報技術活用能力（リテラシー）、マルチメディア、ネットワークングについて学ぶ	21	⑫	服部	
言語の構造一般	世界言語の構造に着目し分類する	言語の種類、世界の諸言語、一般言語学、日本語学、対照言語学、理論言語学、応用言語学について学ぶ	9	⑬	清水	
日本語の構造	日本語を体系的に理解する	日本語の構造、音声・音韻体系、形態・語彙体系、文法体系、意味体系、語用論的規範、文字と表記、日本語史について学ぶ	30	⑭	清水	
言語研究	言語のルールへの気づきを促す	理論言語学、応用言語学、情報学、社会言語学、心理言語学、認知言語学、言語地理学、対照言語学、計量言語学、歴史言語学、コミュニケーション学について学ぶ	3	⑮	福德	
コミュニケーション能力	円滑なコミュニケーションのために必要な能力について学び、どう運用するか考える	受容・理解能力、言語運用能力、社会文化能力、対人関係能力、異文化調整能力について学び、対人関係構築と維持のためのプレゼンテーションについて考える	9	⑯	石田	
日本語教師の資質	教師という立場から学習者にどのように働きかけるべきかを考える	日本語教師の仕事、日本語教師に必要な資質、日本語教育の現場（国内、海外）、日本語学校のクラス編成について知る	6	★	石田	
日本語教育におけるパソコンソフトの活用	PCを使って教案や教具を作成することができる	時間割、カリキュラム、文字カード、プレゼンテーション資料等、授業やクラス運営に必要な書類を作成する	24	⑩⑫	服部	
合計単位時間数			438	※ 1 単位時間を 45 分とする。		

b. 実習

1. 初級

(1) 時間数 全 138 時間

(内容説明 6 時間、授業見学 12 時間、模擬授業 87 時間、教案作成 21 時間、
教壇実習 9 時間、フィードバック 3 時間)

(2) 指導場所

- ・清風情報工科学院・日本語教師養成講座（内容説明、模擬授業、教案作成、フィードバック）
- ・校内日本語科の留学生クラス（授業見学、教壇実習）

(3) 対象

- ・校内日本語科の初級クラスの留学生 10 名程度

(4) 具体的な内容

①内容説明（6 時間）

実習の内容及び具体的な実施方法を説明し、質疑応答を行い、実習に向けたイメージ作りを行う。

②授業見学（12 時間）

校内での実際の授業見学を実施し、留学生の授業について理解を深め、実際の教員の授業法を学ぶ。また、見学後、授業見学レポートを提出する。

③模擬授業（87 時間）

受講者同士で教師役・受講者役を模擬体験し、意見を言い合う。初級文型の導入を中心とし、

受講者 1 人あたり 6 時間程度は教師役を体験する。

④教案作成 (21 時間)

授業内で教案を作成し、講師がフィードバックを行うとともに受講者同士で改善点を指摘しあう。
最終的には講師が、コメントを付け受講者が修正の上、教壇実習に臨む。

⑤教壇実習 (9 時間)

留学生に対し、作成した教案に基づき実際に授業する。学生の生の反応を受け、理解が進んでいるのかなど確認する。受講者 1 人あたり 20 分程度は教師役を体験する。
(留学生はアルバイトとして集めて開催する)

⑥フィードバック (3 時間)

模擬授業と実際の授業との違いなど、受講者が感じたこと、また見学していた受講者の感じたことを話し合い改善点を見つけていく。

2. 中上級

(1) 時間数 全 48 時間

(内容説明 3 時間、授業見学 9 時間、模擬授業 21 時間、教案作成 6 時間、教壇実習 6 時間、
フィードバック 3 時間)

(2) 指導場所

- ・清風情報工科学院・日本語教師養成講座 (内容説明、模擬授業、教案作成、フィードバック)
- ・校内日本語科の留学生クラス (授業見学、教壇実習)

(3) 対象

- ・校内日本語科の中上級クラスの留学生 10 名程度
(中上級は N3 相当クラス及び N1 受験を目的とするクラスを対象に行う)

(4) 具体的な内容

①内容説明 (3 時間)

実習の内容及び具体的な実施方法を説明し、質疑応答を行い、実習に向けたイメージ作りを行う。

②授業見学 (9 時間)

実際の授業見学を実施し、留学生の授業について理解を深め、実際の教員の授業法を学ぶ。また、見学後、授業見学レポートを提出する。

③模擬授業 (21 時間)

受講者同士で教師役・受講者役を模擬体験し、意見を言い合う。中級上級文型の導入を中心とし、受講者 1 人あたり 1 時間程度は教師役を体験する。
中級で 1 回、上級で 1 回は体験する

④教案作成 (6 時間)

授業内で教案を作成し、講師がフィードバックを行うとともに受講者同士で改善点を指摘しあう。
最終的には講師が、コメントを付け受講者が修正の上、教壇実習に臨む。

⑤教壇実習 (6 時間)

留学生に対し、作成した教案に基づき実際に授業する。学生の生の反応を受け、理解が進んでいるのかなど確認する。受講者1人あたり15分程度は教師役を体験する

(留学生はアルバイトとして集めて開催する)

⑥フィードバック (3時間)

模擬授業と実際との違いなど、受講者が感じたこと、また見学していた受講者の感じたことを話し合い改善点を見つけていく。

(2) 時間割

2019年度10月期の講座の時間割は次の通りであった。

月曜午前	月曜午後	火曜午前	火曜午後	水曜午前	水曜午後	木曜午前	木曜午後	金曜午前	金曜午後
講義1	読書1	講義1	意見・井藤1	石田1	西口1	水田1	西口1	意見1	井藤1
10月14日	10月14日	10月15日	10月15日	10月16日	10月17日	10月17日	10月18日	10月18日	10月18日
		開校式	初級指導技術① 1・8課	異語使用と社会 コミュニケーションと読書・聴講	初級模擬授業	初級演習	初級模擬授業	カリキュラム説明 テキスト紹介	日本語教育基礎1
10月21日	10月21日	10月22日	10月22日	10月23日	10月23日	10月24日	10月24日	10月25日	10月25日
日本語の構造①②	日本語教育におけるPCソフトの活用	即位礼正殿	即位礼正殿	世界と日本①	初級模擬授業	初級演習	初級模擬授業	世界と日本②	日本語教育基礎2
日本語教育の歴史と現状①	PC基本操作/教案シート作成			日本語教育の歴史と現状②				日本語教育基礎2	
10月28日	10月28日	10月29日	10月29日	10月30日	10月30日	10月31日	10月31日	11月1日	11月1日
日本語の構造③④	言語教育と情報	日本語の構造⑤⑥	【音声1】	留学生の進路	初級模擬授業	初級演習		●漢字・読書導入 モデル授業 教案作成	コースデザイン
日本語教育の歴史と現状②	PowerPoint 基本操作	日本語教育の歴史と現状③	中級カリキュラム				JLPT N3レベルを知る		
11月4日	11月4日	11月5日	11月5日	11月6日	11月6日	11月7日	11月7日	11月8日	11月8日
文化の日	文化の日	日本語の構造⑦⑧	【音声2】	世界と日本③	初級模擬授業	初級演習		模擬授業① 模範F8①	教材教具
振替休日	振替休日	日本語教育の歴史と現状④	調査点・調査法1	日本語教育の歴史と現状⑤					
11月11日	11月11日	11月12日	11月12日	11月13日	11月13日	11月14日	11月14日	11月15日	11月15日
日本語の構造⑨⑩	言語教育と情報	世界と日本④⑤	初級指導技術② 9・16課	世界と日本⑥	初級模擬授業	初級演習		模擬授業② FB・音読・発音指導	指導理論1
日本語教育の歴史と現状③	PowerPoint 基本操作	日本語教育の歴史と現状⑥		日本語教育の歴史と現状⑦					
11月18日	11月18日	11月19日	11月19日	11月20日	11月20日	11月21日	11月21日	11月22日	11月22日
日本語の構造⑪⑫	日本語教育におけるPCソフトの活用	言語と情報①②	初級指導技術③ 17・25課	世界と日本⑦	初級模擬授業	初級演習		●思い出しよう モデル授業 教案作成	指導理論2
日本語教育の歴史と現状④	PowerPoint 教材作成	日本語教育の歴史と現状⑦		日本語教育の歴史と現状⑧					
11月25日	11月25日	11月26日	11月26日	11月27日	11月27日	11月28日	11月28日	11月29日	11月29日
日本語の構造⑬⑭	日本語教育におけるPCソフトの活用	日本語の構造⑯⑰	【音声3】	コミュニケーション能力①	初級模擬授業	初級演習		模擬授業③ 模範F8③	指導理論3
言語の構造一般①	Excel 基本操作	言語の構造と一般②	調査点・調査法2	対人関係構築					外国語教授法1
12月2日	12月2日	12月3日	12月3日	12月4日	12月4日	12月5日	12月5日	12月6日	12月6日
日本語の構造⑱⑲	日本語教育におけるPCソフトの活用	日本語の構造⑳㉑	【音声4】	世界と日本⑧	初級模擬授業	初級演習		模擬授業④ 模範F8④	評価1
言語と構造一般②	Excel 教材作成	言語と構造一般③	注意すべき者	国際関係と日本語教育					
12月9日	12月9日	12月10日	12月10日	12月11日	12月11日	12月12日	12月12日	12月13日	12月13日
日本語の構造㉒⑳	日本語教育におけるPCソフトの活用	日本語の構造㉓㉔	初級指導技術④ 26・33課	世界と日本⑨	初級模擬授業	初級演習		●読書 モデル授業 教案作成	評価2
言語と構造一般③	Excel シートの操作・印刷	言語使用と社会①		グローバル化と人材活用					
12月16日	12月16日	12月17日	12月17日	12月18日	12月18日	12月19日	12月19日	12月20日	12月20日
日本語の構造㉕㉖	日本語教育におけるPCソフトの活用	言語使用と社会②③	【音声5】	異文化接触①	初級模擬授業	初級演習		模擬授業⑤ 模範F8⑤	外国語教授法2
言語使用と社会④⑤	Excel 並べ替えと抽出	言語と構造一般④	アクセント	異文化理解の重要性					
12月23日	12月23日	12月24日	12月24日	12月25日	12月25日	12月26日	12月26日	12月27日	12月27日
日本語の構造㉗㉘	日本語教育におけるPCソフトの活用	言語と社会④⑤	【音声6】	異文化接触②	初級模擬授業	初級演習			
言語と社会⑥⑦	Excel 関数1	言語と構造一般⑤	イントナーション	異文化感の調整				成績評価(文法)	
12月30日	12月30日	12月31日	12月31日	1月1日	1月1日	1月2日	1月2日	1月3日	1月3日
冬休み	冬休み	冬休み	冬休み	冬休み	冬休み	冬休み	冬休み	冬休み	冬休み
1月6日	1月6日	1月7日	1月7日	1月8日	1月8日	1月9日	1月9日	1月10日	1月10日
日本語の構造㉙㉚	日本語教育におけるPCソフトの活用	言語と構造一般⑥	初級指導技術⑤ 34・41課	異文化理解の心理①	初級模擬授業	初級演習		模擬授業⑥ 模範F8⑥	生教材1
言語と構造一般⑥⑦	Excel 関数2	言語と社会⑧⑨		異文化受容とマナー					
1月13日	1月13日	1月14日	1月14日	1月15日	1月15日	1月16日	1月16日	1月17日	1月17日
成人の日	成人の日	日本語の構造㉛	初級指導技術⑥ 42・50課	異文化理解の心理②	初級模擬授業	初級演習		初級指導実習 実習F8	生教材2
1月20日	1月20日	1月21日	1月21日	1月22日	1月22日	1月23日	1月23日	1月24日	1月24日
世界と日本⑩⑪	言語教育と情報	言語と社会⑩	初級指導技術⑦	異文化理解の共生					
言語と情報⑧	インターネットの活用/試験	言語使用と社会⑧⑨	副教材の使い方	異文化理解の共生				中級指導実習 実習F8	生教材3
1月27日	1月27日	1月28日	1月28日	1月29日	1月29日	1月30日	1月30日	1月31日	1月31日
言語と情報⑨	言語教育と情報	言語使用と社会⑩⑪	初級指導技術⑧	コミュニケーション能力②	初級模擬授業	初級演習			
世界と日本⑫	情報モラルとセキュリティ	世界と日本⑫⑬	試験・活用	論理的思考の実践				副教材 中級指導	関連技術紹介
2月3日	2月3日	2月4日	2/4・井藤1(意見)	2月5日	2月5日	2月6日	2月6日	2月7日	2月7日
世界と日本⑭⑮	言語教育と情報	言語と社会⑭	【音声7】	コミュニケーション能力③	初級模擬授業	初級演習			
言語と社会⑩	情報モラルとセキュリティ	日本語の構造㉜㉝	実践練習/読解	ビジネスプレゼンテーション				修了式	

(3) 文化庁のカリキュラム

文化庁報告書「日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)」(平成30年2月)より、養成講座の関連部分のみ以下に抜粋する。日本語教師養成講座は、これを満たす必要がある。

日本語教師【養成】における教育内容

表1

3領域・5区分・16下位区分	16下位区分の解説	必須の教育内容	その他の教育内容の例	
社会・文化・地域	①世界と日本	日本語教育が必要とされる社会的背景を考慮するために、国際社会の事情と日本との関係、日本の社会・文化、学習者と日本との関係を理解する。	(1)世界と日本の社会と文化	歴史、教育、日本事情、海外の移民施策 等
	②異文化接触	多様な背景を持つ学習者個々に必要とされる日本語教育を考慮するために、学習者が日本語を必要とするに至った経緯や、学習者と周囲との接触の状況を理解する。	(2)日本の在留外国人施策 (3)多文化共生(地域社会における共生)	国際協力、文化交流、地域協力、精神衛生、外国人児童生徒等 等
	③日本語教育の歴史と現状	学習者に適切に接する態度や学習者の背景及び将来を考慮するために、日本語教育の歴史や現状、制度を理解する。	(4)日本語教育史 (5)言語政策 (6)日本語の試験 (7)世界と日本の日本語教育事情	教師養成、学習者の多様と多様化、教育制度、各国語試験 等
言語と社会	④言語と社会の関係	学習者の円滑な社会生活を実現するために、社会、文化、政策と言語との関係やそれによって生じる言語の有り様、また社会的な行動を支える社会的・文化的背景について理解する。	(8)社会言語学 (9)言語政策とことば	ことばと文化、言語社会学、教育社会学、言語療法、言語管理、継承語、社会文化能力 等
	⑤言語使用と社会	様々な社会的状況において円滑なコミュニケーションを実現するために、社会や集団における言語・非言語行動の様相や方角について理解する。	(10)コミュニケーションストラテジー (11)待遇・敬意表現 (12)言語・非言語行動	言語実践、ジェンダー差・世代差、地域言語と共通語、地域法廷通訳等 等
	⑥異文化コミュニケーションと社会	異なる文化・言語を持つ人々が共存する社会の在り方を考えるために、互いの文化・言語に対する態度や言語を用いた人との関係構築について理解する。	(13)多言語・多文化主義	言語・文化対立主義、異文化(自民族)中心主義、言語選択、アイデンティティ、異文化間トランス、言語イデオロギー、複言語・複文化主義 等
言語と心理	⑦言語理解の過程	効果的な日本語教育を考慮するために、学習者の言語情報の処理過程や学習の仕組み、学習の方法について理解する。	(14)談話理解 (15)言語学習	言語処理、予測・推測、記憶、視点、学習者要因 等
	⑧言語習得・発達	個々の学習者に合わせた日本語教育を考慮するために、言語の習得過程や学習者要因、また学習効果を高める方角について理解する。	(16)習得過程(第一言語・第二言語) (17)学習ストラテジー	幼児習得、中間習得、言語失失、バイリンガリズム、学習過程、学習者タイプ、学習障害・発達障害 等
	⑨異文化理解と心理	自文化とは異なる環境にある学習者に配慮した指導を考慮するために、異文化接触によって生じる問題とその解決、また動機や不安などの心的側面について理解する。	(18)異文化受容・適応 (19)日本語の学習・教育の情意的側面	社会的スキル、帰国主義、教育心理 等
言語と教育	⑩言語教育法・実習	学習者の日本語能力と求められる日本語教育プログラムの目的や目標を踏まえた日本語教育を考慮するために、コースを設計する方法、学習項目に合わせた教授法や教材の選択、授業を組み立てるための準備、学習の成果を測る観点と方法、教授能力を高めるための自他の授業分析に必要な知識及び日本語教育を実践する力を身に付ける。	(20)日本語教師の資質・能力 (21)日本語教育プログラムの理解と実践 (22)教室・言語環境の設定 (23)コースデザイン (24)教授法 (25)教材分析・作成・開発 (26)評価法 (27)授業計画 (28)教育実習 ※詳細は38ページ参照 (29)中間言語分析 (30)授業分析・自己点検能力 (31)目的・対象別日本語教育法	学習者情報、教育情報、教室活動、障害者教育 等
	⑪異文化間教育とコミュニケーション教育	文化の多様性を尊重し、異なる文化背景を持つ者同士の円滑なコミュニケーションを実現するために、文化を異にする者の物事の捉え方やコミュニケーション方角について理解する。	(32)異文化間教育 (33)異文化コミュニケーション (34)コミュニケーション教育	学習者の権利、国際・比較教育、国際理解教育、開発コミュニケーション、異文化マナー・シグナル、コミュニケーションに関する言語間対照 等
	⑫言語教育と情報	効率的で創造的な日本語教育を行うために、学習管理や教材作成等に必要となるICT活用方法を知ると共に、情報資源の扱い方について理解する。	(35)日本語教育とICT (36)著作権	
言語にかかわる領域	⑬言語の構造一般	学習をより効率的なものにするために、言語を分析的に観察する方法を理解し、世界の言語及び日本語を系統的・類型的に捉えると共に、学習者の言語と日本語学習の関係を理解する。	(37)一般言語学 (38)対照言語学	世界の諸言語、言語の類型、音声の類型、形態(語彙)的類型、統語的類型、意味論的類型、語用論的類型、言語学史 等
	⑭日本語の構造	日本語そのものに関する知識を学習者に正確に伝えるために、日本語を分析的に捉える方法を理解し、言語教育的な観点から多面的に整理された日本語に関する知識を体系的に身に付ける。	(39)日本語教育のための日本語分析 (40)日本語教育のための音韻・音声体系 (41)日本語教育のための文字と表記 (42)日本語教育のための形態・語彙体系 (43)日本語教育のための文法体系 (44)日本語教育のための意味体系 (45)日本語教育のための語用論的規範	日本語の系統、日本語史、日本語学史 等
	⑮言語研究			理論言語学、応用言語学、構文学、社会言語学、心理言語学、認知言語学、言語地理学、計算言語学、歴史言語学、コミュニケーション学 等
	⑯コミュニケーション能力	学習者の日本語によるコミュニケーション能力を育成するために、コミュニケーション能力に関する知識を身に付ける。また、日本語教育を実践する上で必要となるコミュニケーション能力を向上させる。	(46)受容・理解能力 (47)言語運用能力 (48)社会文化能力 (49)対人関係能力 (50)異文化調整能力	表出能力、談話構成能力、議論能力 等

教育課程編成の目安：表4

日本語教育に関する420単位時間以上の養成コース

実施機関：日本語教師養成研修実施団体

想定単位時間数：420単位時間 ※1単位時間は45分以上とする。

教育方法：伝統的な講義・演習の形式だけでなく、体験、事例研究、問題解決学習など、主体的・協働的に学ぶ機会を取り入れることが求められる。

3領域・5区分・16下位区分		必須の教育内容	単位時間数	科目名(例)		
コミュニケーション	社会・文化・地域	①世界と日本	(1)世界と日本の社会と文化	4~8	世界と日本	
		②異文化接触	(2)日本の在留外国人施策	12~24	日本語教育概論	
			(3)多文化共生 (地域社会における共生)			
	③日本語教育の歴史と現状	(4)日本語教育史 (5)言語政策 (6)日本語の試験 (7)世界と日本の日本語教育事情				
	言語と社会	④言語と社会の関係	(8)社会言語学 (9)言語政策とことば	8~24	言語と社会	
		⑤言語使用と社会	(10)コミュニケーションストラテジー (11)待遇・敬意表現 (12)言語・非言語行動	8~24	異文化コミュニケーションと社会	
			⑥異文化コミュニケーションと社会			(13)多言語・多文化主義
	言語と心理	⑦言語理解の過程	(14)談話理解 (15)言語学習	16~40	言語と心理	
		⑧言語習得・発達	(16)習得過程(第一言語・第二言語) (17)学習ストラテジー			
		⑨異文化理解と心理	(18)異文化受容・適応 (19)日本語の学習・教育の情動的側面			
	教育に関わる領域	言語と教育	⑩言語教育法・実習	(20)日本語教師の資質・能力 (21)日本語教育プログラムの理解と実践 (22)教室・言語環境の設定 (31)目的・対象別日本語教育法 (24)教授法 (29)中間言語分析	8~16	日本語教授法
					8~16	言語教育の基本
					12~24	日本語教育の実践1 (コースデザイン)
				(23)コースデザイン (25)教材分析・作成・開発 (27)授業計画	20~60	日本語教育の実践2 (初級指導)
					20~40	日本語教育の実践3 (中級・上級指導)
					12~24	日本語教育の実践4 (技能別指導)

教育課程編成の目安：表4

コミュニケーション	言語と教育		(28)教育実習	46～100	教育実習	
			(26)評価法 (30)授業分析・自己点検能力	12～24	評価法	
		⑪異文化間教育と コミュニケーション教育	(32)異文化間教育 (33)異文化コミュニケーション (34)コミュニケーション教育	8～16	異文化間教育と コミュニケーション	
		⑫言語教育と情報	(35)日本語教育とICT (36)著作権	8～16	言語教育と情報	
	言語	⑬言語の構造一般	(37)一般言語学 (38)対照言語学	12～24	言語の構造一般	
		⑭日本語の構造	(39)日本語教育のための日本語分析 (40)日本語教育のための音韻・音声 体系 (41)日本語教育のための文字と表記 (42)日本語教育のための形態・語彙 体系 (43)日本語教育のための文法体系 (44)日本語教育のための意味体系 (45)日本語教育のための語用論的規 範	8～16	日本語分析	
				16～32	音韻・音声	
				16～32	文字・表記	
				16～32	形態・語彙・意味	
				20～40	日本語教育文法	
		⑮言語研究				
	⑯コミュニケーション 能力	(46)受容・理解能力 (47)言語運用能力 (48)社会文化能力 (49)対人関係能力 (50)異文化調整能力	4～16	事例分析		
	420単位時間					

※関連ページ：p.20 表1「日本語教師【養成】に求められる資質・能力」、p.37 表1「日本語教師【養成】研修における教育内容

※単位時間数の下限の時間数を合計すると、合計単位時間数は294単位時間となる。420単位時間までの126単位時間分は、単位時間数の幅を生かすことにより、各教育機関における特色ある教育課程を編成することが可能である。

(4) 課題

日本語教師養成講座の開講時のカリキュラム構築は

- ・実習中心のカリキュラムとする
- ・日本語教育能力検定準拠の理論については項目を網羅するが用語を覚える程度
- ・MISJの言語理論を教える
- ・異文化に対する日本文化や日本ビジネスの教育、日本文化の再発見を強化する
- ・PCにより教材などをつくれるようPCリテラシーを向上する

とした。

実習中心としたが、その内容は、清風の日本語科の授業が再現できるようにする、ということに力点があった時もあるれば、応用が効くようにするというところに力点があったこともある。担当者によって、その力点は変化してきた。

その後、文化庁の報告が発表され、日本語教師養成講座は文化庁の報告に準拠することがもとめられるようになった。(1)に示したカリキュラムは、その際につくったものである。しかしながら、既存のカリキュラムを尊重し、文化庁の報告とは文言上の整合性を合わせ、合わせきれない部分(欠落部分)については学習項目を追加するとした。その結果、学習内容とカリキュラムの名称の関係が複雑になりわかりにくくなった。時間数も必要性に比べて過不足がある。

ずれの部分は講師が補完していたが、講師の入れ替わりによって補完が働かなくなっている。受講生からのリクエストによって改善している部分もある。しかし、受講生の仕上がりから逆算すると講座には何らかの改善点があると考えられるがフィードバックが働いていない。講座全体を俯瞰して、改善をなすべきだがなされていない。

養成講座の現場および修了生の採用先である日本語科からは、次のような問題点が定期されている。

- ・シニア層の受講生を中心に、スピーチコントロールができないまま講座を終了しているものがある。
- ・形通りの授業はできるが、応用がきかない。
- ・模擬授業の際の受講生役が上手でないため、緊張感のある模擬授業になりにくい。
- ・理論編の授業の品質が一定でない。脱線が多いというクレームがつく。
- ・せっかく日本語科がとりにあるが、有機的な結合が難しい。授業見学などうまくできないものか。
- ・非漢字圏の教育に即した教育内容になっていない。

3 カリキュラム

3. 1 解決の方針

- ・目標とすべき人物像は、初級では「みんなの日本語」、中級では読解および JLPT の対策が実施でき、かつ応用力がある人材である。
- ・既存のカリキュラムで趣旨が不明確となっているものは、本来の趣旨を確認してメリハリをつける。本来の趣旨がわからなくなっているものは、文化庁のカリキュラムを指針として趣旨を整理する。科目名と実態を一致させる。
- ・文化庁のカリキュラム上は、理論的・抽象的な名前がついていたとしても、それを具体化したもので現場に必要なものは、具体的に噛み砕いて実習に役立つように教える。
- ・既存のカリキュラムと文化庁のカリキュラムとを照合して時間数の変更の幅を確認し、幅から逸脱しないように改変する。
- ・既存のカリキュラムは初級の実習、中級の実習、理論編の授業を並列して行っていたため、受講生が混乱しやすかった。実習は中級から初級の順番に行うことで混乱をへらす。理論編の一部は実習と密接な関係があるものもあるため再編し、実習と関係性が強いものは実習と組み合わせて行う。
- ・異文化系および PC 系の授業については授業数を削減する。
- ・アクティブラーニング型の授業法については、理論編、実習編、周辺編のそれぞれで強化する。養成講座の授業の運営そのものを部分的にアクティブラーニング化するとともに、将来教壇にたつてからの授業の仕方については、研修ビデオを活用する。
- ・非漢字圏に向けた授業法については、研修ビデオを活用する。
- ・実習については、研修ビデオと「お宝シラバス」を活用する
- ・知識の覚え込みの講義については eLearning 化するが、その知識定着の確認や質問の授業はリアルで行う。
- ・言葉で言うよりは見たほうが早いものは動画コンテンツを撮りだめておき eLearning 化する。言葉で説明するより、現場を見せればよいが、その現場が常に存在する訳でも、養成講座にとって都合よく存在するわけでもない。その場その場でのアドリブの偶然性に依存せず、ある一定以上の品質が期待できるものであれば eLearning 化する。これについては、反転授業として利用するか、リアルの授業内で利用する。
- ・講座全体をオンラインに対応できるよう、インフラを整備する。オンライン化については、教師・受講生のオリエンテーションで対応するのを原則とする。

3. 2 カリキュラムの全体像

解決の方針に沿って策定したカリキュラムの全体像を次に示した。

科目の詳細などについては、付録4-4 「授業力アップコース」eLearning 併用型日本語教師養成講座カリキュラムを参照いただきたい。対面授業とは教室でのリアルの授業。eLearning 欄の「スライド視聴」とはPPTの解説動画、「動画視聴」は授業風景などの動画である。

5区分	下位区分	項目	種別	授業番号	旧番号	科目	カリキュラム			対面授業	e-learning			小計
							枠	単位コマ	コマ数		スライド視聴	動画視聴	online試験	
社会・文化・地域	1	世界と日本	理論	1	1	グローバル化と人材活用	1	1.5	1.5	0	1.5	0		
			理論	2	2	諸外国の歴史文化と教育制度	2	1.5	3	0	3	0		
			理論	3	3	時事問題から考える国際社会と日本/試験	2	1.5	3	2	0	1		
				4	~	「世界と日本」試験			0.5	0	0	0	0.5	
							5		8	2	4.5	1	0.5	8
	2	異文化接触	実習	5	4	留学生政策・留学生の現状	1	1.5	1.5	1.5	0	0		
			実習	6	5	留学生の異文化接触 ケース学習	1	1.5	1.5	1.5	0	0		
			実習	7	6	日本の在留外国人政策・特定技能等	1	1.5	1.5	0	1.5	0		
			実習	8	7	多文化共生 地域の国際交流	1	3	3	3	0	0		
	3	日本語教育の歴史と現状	理論	9	8	日本語教育の歴史と現状	6	1.5	9	3	6	0		
			理論	10	9	世界と日本の日本語教育事情	2	1.5	3	0	3	0		
							12		19.5	9	10.5	0		19.5
言語と社会	4	言語と社会の関係	実習	11	10	社会と言葉	2	1.5	3	0	3	0		
			実習	12	11	やさしい日本語 理解と実践	6	1.5	9	7.5	1	0	0.5	
							8		12	7.5	4	0	0.5	12
	5	異文化コミュニケーションと社会	異文化	13	12	接遇・敬語表現	4	1.5	6	3	3	0		
			異文化	14	13	コミュニケーションストラテジー	2	1.5	3	1.5	1.5	0		
			異文化	15	14	言語・非言語行動	1	1.5	1.5	1.5	0	0		
			16	~	「異文化コミュニケーションと社会」試験			0.5				0.5		
						7		11	6	4.5	0	0.5	11	
言語と心理	7	言語理解の過程	理論	17	16	言語理解	2	1.5	3	0	3	0		
	8	言語習得・発達	理論	18	17	言語習得過程	3	1.5	4.5	1.5	3	0		
			理論	19	18	学習ストラテジー	2	1.5	3	1.5	1.5	0		
				20	~	「言語理解・言語習得」試験			0.5				0.5	
	9	異文化理解と心理	実習	21	19	日本語学習と心理	3	1.5	4.5	3	0	1.5		
実習			22	20	学習者心理を知る実践	1	3	3	3	0	0			
						11		18.5	9	7.5	1.5	0.5	18.5	
								69	33.5	31	2.5	2	69	

5 区分	下 位 区 分	項 目	種 別	授 業 番 号	旧 番 号	科 目	カリキュラム			対 面 授 業	e-learning			小 計
							枠	単 位 コマ	コマ 数		ス ラ イ ド 視 聴	動 画 視 聴	on line 試 験	
言語と教育	10	異文化間教育とコミュニケーション教育	異文化	23	21	異文化間教育とその重要性	3	1.5	4.5	1.5	3	0		
			異文化	24	22	言語・文化によるコミュニケーション比較	2	1.5	3	1.5	1.5	0		
			異文化	25	23	異文化コミュニケーション実践	1	3	3	3	0	0		
							6		10.5	6	4.5	0	10.5	
	11	言語教育と情報	PC	26	24	言語教育と情報 (ICT)	2	1.5	3	1.5	1.5	0		
			PC	27	25	情報モラルとセキュリティ	2	1.5	3	0	3	0		
		日本語教育におけるPCソフトの運用	PC	28	26	Wordによる教材作成	1	1.5	1.5	1.5	0	0		
			PC	29	27	PowerPointによる教材作成	2	1.5	3	3	0	0		
			PC	30	28	Excelによる教材作成	1	1.5	1.5	1.5	0	0		
			PC	31	29	Excel 学生、成績管理 (並べ替え・抽出・関数)	1	1.5	1.5	1.5	0	0		
			PC	32	31	授業におけるPCソフト、インターネットの活用	1	3	3	3	0	0		
PC	33	30	試験	1	1.5	1.5	1.5	0	0					
						11		18	13.5	4.5	0	18		
言語	12	言語の構造一般	理論	34	32	言語と構造一般	8	1.5	12	6	6	0	12	
		日本語の構造概論	理論	35	33	日本語の構造 概論	12	1.5	18	9	9	0	18	
		音声音韻	理論	36	34	日本語の音韻・音声	4	3	12	6	6	0		
			理論	37	35	音声指導演習	2	3	6	4	0	2		
							18		36	19	15	2	36	
	13	日本語教育文法	実習	38	36	国語教育と日本語教育の文法体系比較	2	3	6	1.5	4.5	0		
			実習	39	37	初級文型総括「みんなの日本語」	4	1.5	6	3	3	0		
			実習	40	39	指導順大分類による整理「みんなの日本語」	6	1.5	9	4.5	4.5	0		
			実習	41	38	機能による文型整理「みんなの日本語」	3	3	9	6	3	0		
							15		30	15	15	0	30	
		日本語分析の方法と実践	実習	42	40	語彙分析の方法と実践	6	1.5	9	6	3	0		
			実習	43	41	文法分析の方法と実践	6	1.5	9	6	3	0		
実習			44	42	日本語の運用と場面	2	1.5	3	1.5	1.5	0			
								14	1.5	21	13.5	7.5	0	21
						59		105	56.5	46.5	2	105		
14	コミュニケーション能力	実習	45	43	教師としてのコミュニケーション能力 (受容理解、	3	1.5	4.5	3	1	0.5			
		異文化/実習	46	44	プレゼンテーション (言語運用能力)	3	1.5	4.5	4.5	0	0			
		実習	47	~	プレゼンテーション試験			0.5			0.5			
								6		9.5	7.5	1	0.5	9.5
							155	89.5	62.5	2.5	0.5	155		

5 区分	下 位 区 分	項目	種 別	授 業 番 号	旧 番 号	科 目	カリキュラム			対 面 授 業	e-learning			小 計
							枠	単 位 コ マ	コ マ 数		ス ラ イ ド 視 聴	動 画 視 聴	o n l i n e 試 験	
言語と教育	15	言語教育の基本	実習	48	45	日本語教師の資質	4	1.5	6	5	0	1	6	
			理論/実習	49	46	日本語教育基礎	4	1.5	6	3	3	0	6	
			実習	50	47	教材・教具理解	1	3	3	3	0	0		
			実習	51	48	生教材の探し方と利用方法	2	1.5	3	3	0	0		
			実習	52	49	テキスト紹介	2	1.5	3	3	0	0		
							13		21	17	3	1	21	
	16	教授法	実習	53	50	外国語教授法	6	1.5	9	3	5	1	9	
			実習	54	51	指導の知識と技術	5	1.5	7.5	6	0	1.5	7.5	
							11		16.5	9	5	2.5	16.5	
	17	コースデザインと授業計画	実習	55	52	コースデザイン1 調査 準備	2	3	6	3	3	0		
			実習	56	53	コースデザイン2 組み立て	2	3	6	6	0	0		
			実習	57	~	教案作成の基本	6	1.5	9	7	0	2		
							10		21	16	3	2	21	
	18	初級授業の計画と実施		58	~	初級演習ⅠⅡⅢ 動画視聴	1	3	3	0	0	3		
			実習	59	55	初級演習Ⅰ	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	60	56	初級演習Ⅱ	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	61	57	初級演習Ⅲ	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	62	~	初級演習総合 教案作成	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	63	58	初級教壇実習	4	3	12	12	0	0	12	
			実習	64	59	効果的な授業活動	2	3	6	4	0	2	6	
			実習	65	60	副教材の使い方	1	3	3	3	0	0		
			実習	66	61	試験	3	1.5	4.5	4.5	0	0		
	実習	67	~	N4 N5試験対策演習	4	1.5	6	4.5	1.5	0				
							26		67.5	64	1.5	2	67.5	
	19	技能別指導の実践	実習	68	62	JLPT N3レベルを知る	1	3	3	1	1	1	3	
			実習	69	63	漢字・語彙指導 理解と演習	2	3	6	5	0	1	6	
			実習	70	64	文法指導 理解と演習	3	3	9	8	0	1	9	
			実習	71	65	読解指導 理解と演習	2	3	6	5	0	1	6	
			実習	72	66	聴解指導 理解と演習	2	3	6	5	0	1	6	
							10		30	24	1	5	30	
	20	中級授業の計画と実践	実習	73	67	中級の教材分析	1	3	3	1.5	1.5	0	3	
				74	~	中級演習ⅠⅡ 動画視聴	2	1	2	0	0	2	2	
			実習	75	69	中級演習Ⅰ	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	76	70	中級演習Ⅱ	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	77	68	中級授業の流れと教案作成	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	78	71	中級教壇授業	3	3	9	9	0	0	9	
			実習	79	72	音読・発音指導	3	1.5	4.5	3.5	0	1	4.5	
			実習	80	73	精読指導	1	3	3	2	0	1	3	
			実習	81	74	効果的な授業活動	3	1.5	4.5	3	0	1.5	4.5	
	実習	82	75	副教材の使い方	1	3	3	3	0	0	3			
							23		56	49	1.5	5.5	56	
	21	評価と自己点検	実習	83	76	評価法	2	3	6	4	2	0	6	
			実習	84	77	授業分析と自己点検（初級）	2	3	6	3	0	3	6	
			実習	85	78	授業分析と自己点検（中級）	2	3	6	3	0	3	6	
							6		18	10	2	6	18	
								230	189	17	24	0	230	

合計

58

454 312 110.5 29 2.5

142

31%

3. 3 初級実習部分のカリキュラム

a. 全般的な注意事項

■演習授業の目的

- ・①導入、②基本練習、③応用発展練習を別々に時間をかけて練習し、導入や練習方法のスキルを身につける
- ・(1文型①→②→③) ×3回の演習を行うことで、1つの文型導入から発展練習への展開方法を学び、他の文型への応用力を養う。
- ・受講者間でのグループ活動を中心とし、実践でも学習者中心を意識した授業ができるように自ら体験する。

■演習授業のポイント

- ・教師は、授業始めにこの授業の方法や目的を受講者にはっきり伝える。
- ・受講者間での意見交換、アドバイスの方法もコミュニケーション実践の一部と捉え、批判的にならずうまく伝える方法を考え、実践するよう伝える
- ・授業A：グループ活動1回 授業B：グループ活動2回(2回目グループ変更)
対面授業1：授業Aを実施／対面授業2：受講者がグループ活動に慣れた様子であれば授業Bを実施。難しそうであれば授業Aを実施。／対面授業3：授業Bを実施。

b. 初級演習 I の実施方法

授業形態	主な項目	時間(分)	内容	備考
e-learning	授業動画視聴	60	4文型(導入とポイント解説)の動画視聴	
自宅学習	課題		課題：視聴動画から3文型指定動画とは違う導入を考え教案1を作成、導入授業の準備をしてくる	
対面授業1	導入1 演習	180	授業A	提出： 教案1(動画を見て作成、授業前に提出)
対面授業2	導入2 演習	180	授業AまたはB 受講生の様子でA/Bを判断	提出：同上
対面授業3	導入3 演習	180	授業B	提出：同上

授業 A	1.文型の確認	15	教師による授業の流れ説明。指定された文型とポイントの確認を行う。
G = グループ活動	2.G導入案提示 意見交換	30	3人グループになり、課題を提示しあって意見交換をする。教師は2～5の間を巡回指導する
1グループ3名と想定	3.個人で教案修正 準備	15	各自、意見交換を踏まえ自分の教案見直しと授業準備。
	4.Gで導入練習	45	グループ内で順番に導入授業をする。
	5.G反省 意見交換	20	各導入について反省や意見交換。
	6.全体まとめ 教師への質問	20	教師は2～5の活動を見て気づいた点をFBしたり、受講生からの質問を受け付ける
	7.個人で教案修正	10	各自、教案の見直しをする
	8.全体で導入練習（希望者）	10	全員の前で導入授業をする（基本的に希望者 自主性を尊重）
	9.意見交換 まとめ	15	各自コメント 教師からのアドバイス。
		180	※翌日までに教案2提出
授業 B	1.文型の確認	10	指定された文型、練習問題の確認を行う。
G = グループ活動	2.G導入案提示 意見交換	20	3人グループになり、課題を提示しあって意見交換をする。教師は2～8の間は巡回指導する
1グループ3名と想定	3.個人で教案修正	10	各自、意見交換を踏まえ自分の教案見直しと授業準備。
	4.Gで導入練習	40	グループ内で順番に導入授業をする。
	5.G反省 意見交換	15	各導入について反省や意見交換。
	6.個人で教案修正	10	各自、1回目の授業を振り返り、意見交換をもとに教案修正。
	7.Gで導入練習	40	グループを変える。グループ内で順番に導入授業をする。
	8.G反省 意見交換	15	各導入について反省や意見交換。
	9.全体まとめ 教師への質問	20	教師は2～8の活動を見て気づいた点をFBしたり、受講生からの質問を受け付ける
		180	※翌日までに教案2を提出

c. 初級演習Ⅱ・Ⅲの実施方法

授業形態	主な項目	時間(分)	内容	備考
e-learning	授業動画視聴	60	コーラス PCやFC使用 PPT使用 T→S S→S S⇄Sのやりとり等 様々な練習方法を視聴	
自宅学習	課題		課題：演習Ⅰの導入から続く基本 練習案、練習Ⅱの実施の教案作成、 練習実践の準備をしてくる	
対面授業1・2・3	(導入1→) 基本練習 演習	180	授業 A	提出：教案1（動画を見て作成したもの） 教案2（演習を通して修正したもの）

授業 A	1.文型と練習問題の確認	20	指定された文型と練習のポイントの確認を行う。
G = グループ活動	2.Gで練習 B 実施	45	3人グループになり、練習授業をする。 教師は2～3の間は巡回指導する。
1グループ3名と想定	3.G反省 意見交換	20	各自、意見交換を踏まえ自分の教案見直しと授業準備。
	4.全体まとめ 教師への質問	20	教師は2～3の活動を見て気づいた点をFBしたり、受講生からの質問を受け付ける。
	5.個人で教案修正	10	各自、教案の見直しをする。
	6.全体演習	45	全員の前で練習授業をする・ 3名程度
	7.意見交換 まとめ	20	各自コメント、意見交換、教師からのアドバイス。
		180	

3. 4 eLearning のカリキュラム

このカリキュラムの中で、eLearning コンテンツ化可能なものを特定し、その活用方法について整理した。「授業外 eLearning」とあるのは教室外で利用するもの、「授業内」とあるのは教室での授業内で利用するものである。

試験欄は、評価方法である。原則として、教室における授業内か、または課題提出によって行う。

5 区分	下 位 区 分	項目	種 別	授 業 番 号	旧 番 号	科目	詳細	スライド・動画		試験			
								授 業 内	授 業 外 e- learni ng	授 業 内	授 業 外 onlin e	課題提出	
社会・文化・地域	1	世界と日本	理論	1	1	グローバル化と人材活用	スライドで、グローバル化に伴う人材活用の現状を知る。		○				
			理論	2	2	諸外国の歴史文化と教育制度	スライドで、2020年現在で留学生が多い国(ベトナム・中国・韓国やミャンマー・インドネシア・フィリピン・スリランカ・ネパール等)の文化と教育制度について学ぶ		○				
			理論	3	3	時事問題から考える国際社会と日本/試験	動画視聴・留学生を取り巻く国際社会の課題を取り上げた内容。授業で、意見交換し、日本語教育と社会との関係性を考える		○				
				4	~	「世界と日本」試験							世界と日本
	2	異文化接触	実習	5	4	留学生政策・留学生の現状	留学生を取り巻く政策、法律、ビザ、アルバイトの実態など、社会一般の現状を知り、留学生への理解を深める						
			実習	6	5	留学生の異文化接触 ケース学習	異文化接触によって起きた清風の留学生の事例を紹介し、教師や学校の対応方法について学ぶ。4の授業のより具体的に身近な例を知る。						
			実習	7	6	日本の在留外国人政策・特定技能等	スライドで、留学生以外の外国人政策の概要を知り、留学生以外の今後教育対象となりうる生活者や特定技能などについて理解を深める		○				
			実習	8	7	多文化共生 地域の国際交流	特別授業：自治体の国際交流課を訪問し、多言語多文化主義に基づく多文化共生の施策や地域の国際交流の今を知る。ワークシート提出						ワークシート
	3	日本語教育の歴史と現状	理論	9	8	日本語教育の歴史と現状	スライドで、日本語教育の歴史と現状を学ぶ。授業でまとめとミニテスト スライド+授業を前半後半として2回実施する。		○			日本語教育の歴史と現状 2回	
			理論	10	9	世界と日本の日本語教育事情	国内の日本語教育現場（専門学校、大学、子供、ビジネス、籍民etc）海外大学の日本語学科 留学生向け教育機関 清風の関係先などの概要を知る。JLPTやNAT-TEST、EJUの目的や実施状況についての知識を得る。		○				
言語と社会	4	言語と社会の関係	実習	11	10	社会と言葉	スライドで日本社会で使用されている独自の言葉や話し方（若者言葉 共通語と方言 年代差）があることを学ぶ。		○				
			実習	12	11	やさしい日本語 理解と実践	スライドで「やさしい日本語」とは何か、成立の経緯や社会での運用例を知る。自治体のHPなども紹介。翻訳のポイント、語彙コントロールの概念を学ぶ。その後翻訳練習、話し方の練習をする。教室活動でも状況に応じて使用することを意識させる。		○			やさしい日本語（会話）	
	5	異文化コミュニケーションと社会	異文化	13	12	接遇・敬語表現	スライドで敬語の基本と使用場面、日本式ビジネス文化について基礎知識を得る。授業で、日本式ビジネス文化の中での使用法、社会人としてのマナーを行為も含めて学ぶ。		○				
			異文化	14	13	コミュニケーションストラテジー	スライドで、コミュニケーションストラテジーの種類について学び、授業で各ストラテジーを実践する		○				
			異文化	15	14	言語・非言語行動	非言語コミュニケーションとは何か、その種類、非言語コミュニケーションの役割について実際の行為を交えながら学ぶ。 （『人は見た目が9割』わかりやすい）						
				16	~	「異文化コミュニケーションと社会」試験							異文化コミュニケーション
言語と心理	7	言語理解の過程	理論	17	16	言語理解	スライドで談話構成とは何か、談話理解のための方策の知識を得る						
			理論	18	17	言語習得過程	スライドで言語習得の過程、第一言語、第二言語、中間言語の概念についての基礎知識を学び、授業でまとめや確認を行う		○				
	8	言語習得・発達	理論	19	18	学習ストラテジー	スライドで学習ストラテジーの種類について学び、授業自らの学習ストラテジーを話し合う		○				
				20	~	「言語理解・言語習得」試験						言語習得・理解	
	9	異文化理解と心理	実習	21	19	日本語学習と心理	動画視聴：留学生が留学の目的や日本語学習で難しいこと、生活での不安などを語る内容。授業で、外国語を習得するときの学習者の心理について気づいたことを話し合う。		○				ワークシート
			実習	22	20	学習者心理を知る実践	特別授業：理解の難しい言語による授業を、実際に学習者になり疑似体験する。その時の自分の心理状態をフィードバックする。						ワークシート

5 区分	下 位 区 分	項 目	種 別	授 業 番 号	旧 番 号	科 目	詳 細	ス ラ イ ド・動 画		試 験			
								授 業 内	授 業 外 e- learni ng	授 業 内	授 業 外 onli ne	課 題 提 出	
言語と教育	10	異文化間教育とコミュニケーション教育	異文化	23	21	異文化間教育とその重要性	スライドで異文化間教育とは何か、国際理解のための教育や外国にルーツがある子供教育など基礎知識を得る。		○				
			異文化	24	22	言語・文化によるコミュニケーション比較	スライドで、言語・文化によるコミュニケーションの違いを知り、違いを受け入れることやコミュニケーション時に気を付けることを学ぶ。		○				
			異文化	25	23	異文化コミュニケーション実践	特別授業：異文化コミュニケーションの実践として、留学生と質疑応答。 留学生の日本語レベルを体感として知り、自らのコミュニケーションの方法を内省する機会とする。						ワークシート
	11	言語教育と情報	PC	26	24	言語教育と情報 (ICT)	スライドでICTとは何か、語学教育の現状を学ぶ。授業で追加説明。		○				
			PC	27	25	情報モラルとセキュリティ	スライドで、情報モラルとセキュリティについての基礎知識を学ぶ。		○				
		日本語教育におけるPCソフトの運用	PC	28	26	Wordによる教材作成	Wordの教材例を見せ、作成練習。課題を出し、提出物を添削						
			PC	29	27	PowerPointによる教材作成	PPTの教材例を見せ、作成練習。課題を出し、提出物を添削						
			PC	30	28	Excelによる教材作成	Excelの教材例を見せ、作成練習。課題を出し、提出物を添削						
			PC	31	29	Excel 学生、成績管理 (並べ替え・抽出・関数)	Excelの管理表見せ、並べ替え、抽出、関数など実行する。課題を出し、提出物を添削						
			PC	32	31	授業におけるPCソフト、インターネットの活用	授業でのインターネット活用法や語学学習に有用なソフトを紹介、使用体験する。						
	PC	33	30	試験	PCを用いた試験、試験終了後に解説する。(採点は別途)								
13	12	言語の構造一般	理論	34	32	言語と構造一般	スライドで言語の構造一般や対照言語学の基礎を学ぶ。授業で解説の追加や質疑応答の後、試験をする。		○			言語と構造	
			理論	35	33	日本語の構造 概論	スライドで日本語の構造の基礎を学び、授業で文字表記、語彙、漢字、意味、語用体系について学ぶ。授業での質疑応答の後試験をする。		○			日本語の構造	
	音声音韻	理論	36	34	日本語の音韻・音声	スライドで、音声一般、日本語の音韻、音声の基礎知識を学ぶ。授業で、調音点調音法・アクセント・イントネーションについて実際に発音してみながら学ぶ。		○					
		理論	37	35	音声指導演習	動画：学習者の会話、音読場面 授業で、問題点を考え、その後、問題点や指導法を話し合う。(1動画視聴/2授業) ×2回	○					演習での評価	
	日本語教育文法	実習	38	36	国語教育と日本語教育の文法体系比較	スライドで、国語文法と日本語文法の違い、国語教育と語学教育の違いを学ぶ。授業で確認と簡単な試験。		○				国語教育と日本語教育	
		実習	39	37	初級文型総括「みんなの日本語」	スライドで、文型とは何か、「みんなの日本語」の初級文型を知る。授業で、教科書を見ながら「みんなの」のI・IIの構成を学ぶ。		○				課題	
		実習	40	39	指導順大分類による整理「みんなの日本語」	スライドで、「みんなの」の練習A・B・Cの展開、文型を1課から確認する。 授業で復習A.B.C単位の分類、分類単位での学習のポイントを学ぶ。		○				課題	
		実習	41	38	機能による文型整理「みんなの日本語」	スライドで、文型の機能とは何か、機能分類について学ぶ。課題：「みんなの」の1/4くらいの文型を機能分類する。分類表の完成。授業で、同じ機能における分析、可能、依頼、勧誘、理解などの項目で文型を整理することを学ぶ。		○				課題	
		実習	42	40	語彙分析の方法と実践	スライドで、語彙レベルの語用例を知り、誤用の原因やレベルに応じた適切な訂正方法を学ぶ。授業で例文を作りながら分析の手法を身につける。(1.5スライド/3授業) ×2回 (初級/中級以上)		○					
	日本語分析の方法と実践	実習	43	41	文法分析の方法と実践	スライドで、文法レベルの語用例を知り、誤用の原因やレベルに応じた適切な訂正方法を学ぶ。授業で例文を作りながら分析の手法を身につける。(1.5スライド/3授業) ×2回 (初級/中級以上)		○					
		実習	44	42	日本語の運用と場面	スライドで、場面や状況による使い方の語用例を知り、誤用の原因や適切な訂正方法を学ぶ。授業で、場面設定をしてそれにふさわしい例の提示練習をする。		○					
		実習	45	43	教師としてのコミュニケーション能力 (受容理解)	動画：教師と学習者の授業中のやりとり スライド：教師として必要なコミュニケーション能力についての知識を得る。授業で、個別面談や進路相談の例を取り上げ、教師としてのコミュニケーションの取り方を考える。	○	○					
	14	コミュニケーション能力	異文化/実習	46	44	プレゼンテーション (言語運用能力)	発声法、スピード、間の取り方、語彙コントロールなど授業で必要なプレゼンテーション能力について知り、実践してみる。						ミニプレゼンター
			47	-	プレゼンテーション試験								

3. 5 授業の実施順序

10-59-1	教師の資質と能力	動機付け
16-57	コミュニケーション能力（受容理解、異文化調整）	
16-55	対人関係構築	
16-56	論理的思考の実践	
16-58	ビジネスプレゼンテーション	
2-6	留学生政策・留学生の現状	留学生の状況
2-7	日本の在留外国人政策・特定技能等	
2-9	留学生の異文化接触 ケーススタディから考える	
2-8	地域の文化交流。国際交流	地域
1-1	グローバル化と人材活用	国際
1-2	日本式ビジネス文化	
1-3	国際関係と日本語教育	
1-4	諸外国の歴史及び文化と教育制度	
1-5	時事問題から考える国際社会と日本	
3-10	日本語教育の歴史と現状	日本の現状
4-12	日本および諸外国の言語政策	諸外国の現状
4-13	「やさしい日本語」	日本の現状
12-31	言語教育と情報（ICT）	
12-32	情報モラルとセキュリティ	
6-17	多言語・多文化主義	異文化への考え方
6-18	自文化とアイデンティティ	
4-11	地域、世代、性別による言語	
5-15	コミュニケーションストラテジー	
5-14	接遇・敬語表現	
5-16	言語・非言語行動	
11-27	異文化間教育とその重要性	
11-28	異文化受容とマネジメント	
11-29	言語・文化によるコミュニケーション比較	
9-25	異文化理解と心理	
11-30	異文化コミュニケーション実践	留学生と交流
9-26	学習者心理を知る実践	外国語授業体験
7-19	談話理解	授業体験後言語習得の過程を学ぶ
7-20	言語処理、言語学習	
8-21	言語習得過程（第一言語・第二言語）	
8-22	中間言語	
8-23	学習ストラテジー	
8-24	言語理解・習得概論	
12-33	Wordによる教材作成	IT技術
12-34	PowerPointによる教材作成	
12-35	Excelによる教材作成	
12-36	Excel 学生、成績管理（並べ替え・抽出・関数）	
10-39	言語と構造一般	言語基礎知識
10-40	日本語の構造 概論	
10-51	国語教育と日本語教育の文法体系比較	
10-60	日本語教育基礎	教育基礎知識
10-61	外国語教授法	
10-63-1	評価法	実践前基礎知識
10-64	教室・言語環境の設定	
10-81	JLPT N3レベルを知る	JLPT概要とレベル感
14-47	文字と表記	漢字文字語彙の基礎知識
14-48	漢字の構造	
14-49	語彙体系	
14-50	語彙分析の方法と実践	
10-82	漢字・語彙指導 理解と演習	漢字・文字語彙演習
14-52	文法分析の方法と実践	文法分析方法
10-83	文法指導 理解と演習	文法演習
10-84	読解指導 理解と演習	読解演習
10-85	聴解指導 理解と演習	聴解演習

14-53	語用論とは	
14-54	日本語の運用と場面	
10-86	中級の教材分析	中級総合テキスト理解
10-87	中級演習Ⅰ	中級演習
10-88	中級演習Ⅱ	中級演習
10-92	精読	
14-41	音声入門	音声基礎知識
14-42	調音点・調音法	
14-43	注意すべき音	
14-44	アクセント	
14-45	イントネーション	
14-46	音声指導演習	
10-91	音読・発音指導	音声演習
10-62-1	指導の知識と技術	模擬授業に向けて
10-93	効果的な授業活動	
10-89	中級模擬授業	模擬授業
10-90	授業分析と自己点検	
10-94	副教材の使い方（中級）	中級周辺知識
10-66	生教材の探し方と利用方法	
10-67-1	テキスト紹介	
10-65	教材・教具理解	
10-70	「みんなの日本語」文型総括	初級基礎知識
10-71	みんなの日本語 機能による文型整理	
10-72	みんなの日本語 指導順大分類による整理	
10-74	初級授業の流れと教案作成の基本	
10-75	初級演習Ⅰ	
10-76	初級演習Ⅱ	
10-77	初級演習Ⅲ	
10-62-2	指導の知識と技術	模擬授業に向けて
10-80	効果的な授業活動	
10-78	初級模擬授業	
10-79	授業分析と自己点検	
10-73	副教材の使い方	
10-67-2	テキスト紹介	
10-63-2	評価法	実践後の検証
10-74	宿題・試験	
10-68	コースデザイン1 準備 調査	実践の経験をもとに考える
10-69	コースデザイン2 組み立て	
12-37	インターネットの活用/試験	
12-38	授業におけるPCソフトの運用例	
10-59-2	教師の資質と能力	自己点検

4 運用方法

4. 1 運営モデル

現在の運営モデルは、リアル型である。これを段階を追って更新してゆく。

現状 リアル型（既存カリキュラム）

第1期 リアル・オンライン併用型（既存カリキュラム）

第2期 リアル・オンライン・eLearning 併用型（新カリキュラム）
eLearning 率ひくい

第3期 リアル・オンライン・eLearning 併用型（新カリキュラム）
eLearning 率3割程度

第2期に、2. 3に示した新カリキュラムに移行する。

また、eLearning コンテンツについては、第1期に随時構築してゆき、第2期において利用を開始するが、講座中も、徐々にeLearning部分を増やしてゆく。第2期においても、初期には教室を確保し、eLearning コンテンツではなく、リアルの講師がパワーポイントを使って授業し、内容がこなれた段階で、eLearning 化し、教室の利用時間を下げる。

第2期、第3期において、清風情報工科学院内の教室での開講が前提である。但し、チューターをおいたサテライト教室があれば、サテライト教室での同時開講も可能かもしれない。

4. 2 講師のスタイル

現在のスタイルは、リアル型である。これを段階を追って新たな形態へ適応させてゆく。

現状 リアル型

第1期 ハイブリッド型

第2期以降（オンライン型）

第1期では、これまでの授業を再現できればよしとする。その中でアクティブラーニング的な要素に挑戦してみて、実現可能で教育効果のあるものは採用する。オンライン型への移行が必要であるかどうかはわからない。実施してみて、講師の適応度、受講生の反応によって決めればよい。

また、第2期以降になると、新カリキュラムになると新カリキュラムに切り替わる。そこで、4月からの半年間は、授業は既存カリキュラムで進行しておき、講師が新カリキュラムへ準備する期間とする。

4. 3 運用技術

現状で、利用している情報技術は

- ・教室固定型ビデオカメラ
- ・講義をビデオで収録し、サーバーにアップして受講生が復習に使う

である。

第1期では、

- ・教室+Zoom+SNS+Google Classroom
- ・教室固定型PC+カメラ
- ・板書 or PPT+顔

とし、受講生による遠隔受講を可能とする。

また必要に応じて、講師が自宅から授業の実施ができるようにする。その際は、

- ・学校資源へのアクセスはZoom+Chrome Remote Desktop+人のサポート

である。

第2期以降では、

- ・教室+Zoom+SNS+Google Classroom
- ・教室固定型PC+カメラ
- ・板書 or PPT+顔+動画型eLearningコンテンツ
- ・反転型eLearningコンテンツ

である。受講生による遠隔受講を可能とする。教室の利用時間を削減する。

また必要に応じて、講師が自宅から授業の実施ができるようにする。その際は、

- ・学校資源へのアクセスはZoom+Chrome Remote Desktop+人のサポート

である。

4. 4 受講生管理・評価

受講生管理は、リアルの教室またはオンライン上において、対面的に行う。フォローアップについては、SNSでチャットルームを構築し、その上で行う。課題提出については、リアルで行うか、Google Classroom上の課題管理機能を使う。

評価については、評価項目を決めておいて対面的に行う。大きなテストはリアルで行う。小テストについては、リアルで実施するか、必要に応じてオンラインで行う。Google Formsを使えば、簡単なテストを作り、自動採点ができる。Google Classroom上にも同様の機能がある。

4. 5 講師管理

講師管理は、職員室またはオンライン上において、対面的に行う。オンライン上で対面的に行う場合は、Zoom会議を使う。フォローアップについては、メーリングリストまたはSNSでチャットルームを構築し、その上で行う。

出退勤などの労務管理については、学内の出退勤サービスを利用する。オンライン勤務をした場合については、学内の非常勤PCにChrome Remote Desktopを利用してログインし、そこから行う。出退勤サービスがクラウド上で利用可能であれば、自宅から直接アクセスして行う。

学内のファイルのセキュリティについては、ファイルサーバー上の権限を再設定し、学外からの不正アクセスを監視する。

5 今後の課題

講座の開講に向けて残された課題は以下の通りである。

(1) 第1期の開講準備

- ・講師向けオリエンテーション実施(オンライン講座入門編、オンライン勤務入門編を利用)
- ・カリキュラムの統括者の任命と業務の把握し直し
- ・非常勤講師の統括と把握のし直し
- ・文化庁への申請の準備

(2) 第2期のカリキュラム改変目的と手段と効果のすり合わせ

- ・担当講師と今回のカリキュラム改変について議論を深める
 - －カリキュラム目的
 - －カリキュラム配列の改変
 - －理論部分の改変
 - －演習部分の改変
 - －eLearning化の方針
- ・カリキュラムの修正
- ・時間割変更に伴う担当変更・時間変更の合意

(3) eLearning部分のコンテンツ設計

- ・理論型の方針
- ・経験拡張型の方針
- ・PPT化の開始
- ・収録の開始

(4) 運営にあたってのさらなる課題の洗い出し

- ・受講生に向けてのオリエンテーション
- ・年度更新作業の洗い出し、実施
- ・ITの環境の構築(教室、クラウド、講師、法人、受講生)

